

スーフィー聖廟の発展と建造物の造営

——デリーにおけるシェイフ・ナスィールッディーン廟の例——

荒松雄

- 一 はじめに——課題と方法
- 二 シェイフ・ナスィールッディーンとトゥグルク支配層
- 三 ダルガー内域とその周辺の建造物
- 四 ダルガーの変遷と建造物の造営
- 五 おわりに——宗教権威と政治権力

一 はじめに——課題と方法——

この小論は、現在もニューデリー東南郊に現存しているシェイフ・ナスィールッディーン・マフムード Shaikh Nasir al-Din Mahmud のダルガー dargah の内外に残る建造物を主たる資料として、中世以降のインド社会におけるスーフィー聖廟の発展と建造物の造営

る宗教と政治との関係についてのいくつかの問題を扱う一つの試論である。インドにおけるスーフィーズムの発展、ピール *Pir* あるいはシェイフと呼ばれたスーフィーの聖者⁽¹⁾やその宗派・教団の活動およびその系譜などについては、わが国では、これまでほとんど研究が行なわれていない。⁽²⁾したがって、本稿の論旨に関連する範囲内で、はじめにその歴史的内容の一端を簡単に記しておきたい。また、本稿では、インド人をはじめとする海外の学者による従来の諸研究⁽³⁾においてはほとんど用いられなかったところの、ダルガーの内外に残存するさまざまな建造物を資料として活用する方法を採ってみたので、それに関する私自身の問題意識についても、あらかじめ、説明しておきたいと思う。

一 デリーにおけるスーフィー聖者の活動

ガズニー・ゴール両勢力の北インド侵入とそれにつづくいわゆるサルタナット支配の成立は、インドにおける社会構成と権力構造とに大きな変革を齎らし、十三世紀以降のインドにおいては、ムスリム支配の進展とイスラムの浸透とが重要な問題となってくる。このイスラムの浸透の歴史については、西方からインドへやってきた初期のスーフィー聖者たちの活動、および、彼らのムリード *murid* (弟子) や、ハリーフ *Khaliifah* すなわち後継者として指導的な役割を果たしたインド出身のピールやシェイフたちの活動を無視することはできない。かつてハミルトン・ギブ *Hamilton Gibb* は、「民衆的イスラムが、宗派、儀礼および信仰内容において、とことんまで当惑させられるほどの多様性を示したのは、インドにおいてである」と述べたことがあるが、十三世紀から十六世紀に至るインドにおけるスーフィー諸派の聖者の活動は、その諸教派の活動の拠点となったダルガーの機能とその影響力とあいまって、世界史におけるイスラムの浸透・拡大の歴史において、まことに多彩にして特異な役割を果たしてきたものといえるのである。

スーフィーの聖者たちは、外地からインドへやって来たものも、また、インドにおいて彼らのハリーフアとしてその指導的地位を継承したのも、いずれも、ハーンカー *Khanganā* と呼ばれた場所（日本流に訳せば、道場あるいは庵とでもいうべきか）に居をかまえて修道に励み、あるいは布教・改宗に努力するのが通例であった。これらのハーンカーとそれに付属するマジュリス・ハーナ *majlis khana*（集会堂）その他の宗教施設には、すでにサルタナット時代の初期から、イスラム教徒ばかりでなく、ときにはヒンドゥー教徒やその他のインド人の異教徒たちも出入りすることができた。したがって、これらの場所が、インド人民衆のイスラム教への改宗のための重要な場となったことは、これもまた、想像するに難くないところである。

すでに、西方のムスリム諸王権による支配体制のもとにおいて、一部のスーフィー聖者たちは、民衆のあいだに強い影響力を持っていた。したがって、スルターンや支配層は、彼らの言動や教団の活動に対してはつねに重大な関心を抱き、ときには批判あるいは弾圧し、ときには懐柔するといったような方策を採ってきたのである。一方、スーフィー聖者やその信奉者の側でも、支配層を無視するか、あるいは権力者や富者との直接の接触を敢えて拒み、またはそれに対して無関心を装うものも多かったが、またその反面では、みずから、すすんで支配層や富者に接近し、それに奉仕するものもいたのである。

十三世紀以降のインドにおいても、スーフィー聖者やその信奉者たちの活動やそれに対する権力の側の対応の姿勢には、ほぼ、同じような傾向がみられた。しかし、人口の圧倒的多数を占めるヒンドゥー教徒を擁し、発達した統治制度を持っていたインドの王権に対して、きわめて少数の異民族・異教徒として、しかも侵略者・征服者として権力を奪取したサルタナット支配層にとっては、西アジアやアフガン台地におけるムスリム支配層とはおのずから異なる

姿勢と政策とが必要だったのである。⁽⁶⁾ すなわち、彼ら支配層は、一方では、異教徒の改宗に努力するスーフィー指導者たちの実践を評価しながらも、他方においては、彼らの民衆に及ぼす影響力、とくに新しくムスリムに改宗したインド人に対する影響力のゆえに、スーフィー指導者に対してはつねに警戒することを怠らなかつたのである。もちろん、こうした場合、スルターンや権力者個人の信仰の問題もあり、時代と人物とによつては、彼らのスーフィー聖者や教団に対する対応には微妙な差異が認められる。しかし、残念ながら、これらの点については本稿で触れる余裕はない。

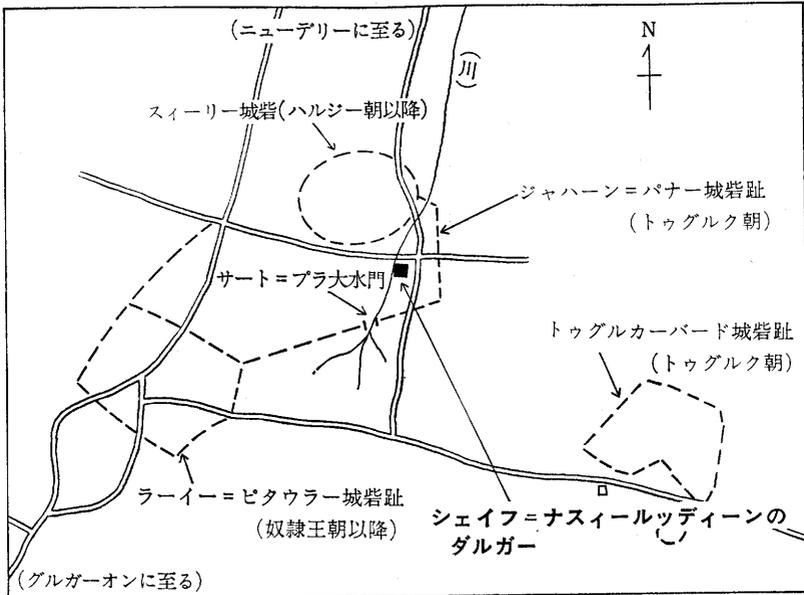
初期のスーフィー聖者たちの活動が、とくに西北インドにおいて著しかったことは当然であるが、なかでも、西北インドのラホール・ウチュ・ムルターンなどの政治・戦略上の拠点や、サルタナットの首都デリーとその周辺の地は、彼らの実践の中心地であつた。⁽⁷⁾ 概していうならば、西北インドにおける初期のスーフィー指導者のうちでは、スフラワルディー Suhrawardi 派はウチュ・ムルターンの地に、チシュティー Chishtī 派はデリーとその周辺の地に、彼らの宗教活動の拠点を構えた。もっとも、首都デリーには、チシュティー派の聖者のほかに、スフラワルディー派およびその他若干の小セクトの指導者たちも活動してはいた。しかし、十三世紀から十四世紀中葉にかけて、首都デリーのスーフィー思想とその実践活動の歴史において指導的な役割を担つたのは、チシュティー派の聖者、とくにシエイフクトゥブッディーンニバフティヤールニカーキー Shaikh Qutb al-Din Bakhtiyar Kaki とシエイフニザームッディーンニオーリヤー Shaikh Nizam al-Din Auliya の二人であつた。この二人の指導者は、のちに、それぞれ「クトゥブニサーヒブ」 Qutb Sahib (日本流に訳せば「おットゥブさま」⁽⁸⁾とも呼ぶべきか)、および「スルターンニルニマニヤーイフ」 Sulṭān al-Mashāikh (シエイフ中の王の意)⁽⁹⁾ あるいは「シエイフニルニマニヤーイフ」 Shaikh al-Mashāikh

(シェイフ中のシェイフの意) などと呼ばれたが、この通俗的な尊称は、今日に至るまでインド中でひろく用いられてきている。

シェイフロクトゥブッディーンは、奴隸王朝初期のスルターンが拠ったところの、いわゆるラーイー＝ピタウラー Rai Pithaura の城砦外、南方ほど遠からぬ地点にそのハーンカーを構えたらしく、彼が死ぬと、その地に墓が設けられた。その後、この墓を中心に、その地域に、サルタナット時代を通じて、墓やモスクやその他の施設・建造物がつぎつぎに建てられ、ムガル時代には、デリーのみならず全インドに知られる有数のダルガーとして発展していき、著名なムスリムのズィヤラットガー Ziyaratgah (巡礼地) として今日に及んでいる。一方、シェイフ＝ニザームッディーンの方は、当時のムスリム支配の中心拠点たる旧デリーの王城から北方かなりの距離を隔てるギヤースプル Chiyāthpur (奴隸王朝のスルターン＝ギヤースッディーン＝

スィーフイー聖廟の發展と建造物の造營

挿図1 シェイフ＝ナスィールッディーンのダルガーの位置



バルバンの名にちなむ新興集落)の付近の地にハーンカーを構えたが、この地は、のちにこの聖者の名をとってニザームブル Nizampur として知られるようになり、彼のダルガーは、これまた、インドのみならず、インド域外からのムスリムの巡礼者をも集める著名な聖地となったのである。

本稿でとりあげるシェイフナスィールッディーンマフムードは、のちに述べるように、この二人のデリーにおけるスーフイー指導者の属していたチシュティ派のビールであつて、シェイフニザームッディーンオーリヤーの直接のハリーフア Khalifah すなわち後継者の一人であり、デリーのウイラーヤット Wilayah (管区)を任された人物である。本稿ではほとんど触れる余裕はないが、インドにおけるスーフイー聖者の系譜のなかでは、このシェイフナスィールッディーンは、彼に先立つデリーの二人のチシュティ聖者に次ぐ第三の指導者としての重要な地位を占める人物である。彼が、のちに、「ローシヤネチラーゲデリー」Raushan-i-Chiragh-i-Dihli すなわち「デリーの灯明の光」(日本語に直せば「デリーのお灯りさま」とでも訳すべきか)という通俗的敬称によってひろく人びとの崇敬をあつめたのも、きわめて当然のことといえよう。⁽⁸⁾

二 ダルガーの意義と建造物の研究

西方のイスラム世界において、スーフィーズムは、ムスリム支配下における社会思想や政治思想の展開に大きな影響を与え、九世紀以降の西アジアは、何人かの重要なスーフィー思想家を輩出している。それに比べてみると、インドにおいては、きわめて少数のものを除くと、ひろくイスラム世界に影響を及ぼすほどの傑出した人物は、さき述べたデリーにおける三人のチシュティ派の指導者をも含めて、現われてはいない。

しかし、ひるがえって、インドにおけるスーフィー聖者たちの実践活動、とくに、彼らのハーンカーを中心とする弟子や信奉者たちとの関係・交流の面に目を向けてみると、そこには、まことに活発・多彩な様相を認め得る。しかも、これらのスーフィー指導者たちのなかには、むしろ、その死後において、彼に賦与されたいわば聖性の増大にもなつてその權威を確立し、その結果、民衆ばかりでなく支配層に属するものにも大きな影響を及ぼすに至つたものを何人も見出すことができるのである。

その生前において、すでに信奉者のあいだにつよい影響力をもっていたピールは、ふつう、その死後には、彼自身の宗教的実践の拠点となつていたその同じ土地、同じ場所に葬られることが多かった。そして、そこに造られた墓（インドでは、ウルドゥー語で、マザール *mazar* またはカバル *qabar* などの名称で呼ばれる）の周辺には、やがて、その弟子やハリーフアの墓が造られるようになり、また、集会堂やモスクやその他の宗教施設が、さまざまな階層の人びとによって寄進されるようになる。さらに後代になると、この聖者の徳を慕う人びとによって、その地に、自分たちや親族の墓が営まれ、諸種の建物が設けられる。こうして、本来の聖者自身の墓を中心に、一定の区域に、いわば「聖廟」と呼ぶにふさわしい一種の聖域ができあがっていったのである。

こうした聖者の墓を中心として次第に拡大・発展してゆく聖廟・聖域の成立と発展とについては、聖者の持つ、あるいは聖者に賦与された聖性の齎すさまざまな現象、たとえば、その効果のなんらかの恩恵にあずかるうとする、いわば「あやかり」願望の成立、あるいはインドムスリムの社会における「墓崇拜」(カバル・パラステイ *qabar parasti*) という慣習の発展などの興味ある問題がその基盤にある。筆者も、それらのことさらに関しては若干の私見を持つものであるが、それについては別の機会に論じたいと思う。

ところで、インドにおいては、このようなスーフィー聖者の墓を中心に成立した聖廟・聖域を「ダルガー」*darğa*と呼んできた。もちろん、この語は、聖者の本来の墓のみに使われることもあるし、また広い区域をもつ聖域全体について用いられる場合もある。この語は、本来は、ペルシア語の「ダル」*dar* すなわち扉・門を意味する語と、場所を意味する「ガー」*garh*との合成語であって、転じて、王の宮廷や、ときにはモスクなどをも意味する語としても使われてきたものである。しかし、インドにおいては、次第に、さきに記したようなムスリム宗教者、とくにスーフィー聖者の墓廟の意味に用いられるようになっていった。私自身、厳密な意味での資料は持ち合せているわけではないが、アフガニスタン・イランおよび西アジアの各地、あるいはイスラムが浸透していった他の諸地域においては、右のような意味での「ダルガー」という言葉の使い方は、ほとんどないようである。そして、名称ばかりでなく、インドにおけるダルガーの如き高度に発展した内容を持つ聖廟・聖域の存在そのものも、他にあまり例を見ないようである。しかも、十三世紀以降のインドにおけるダルガーの社会的・政治的な役割は、他の地域のムスリム社会にその比をみないほどの重要性をもつものと思われる。私が、ダルガーの発展を、中世以降のインド史研究の一つの重要な課題として選んだ理由の一端もそこにあるのである。

ところでスーフィー聖者によっては、その死後における権威が、ときにはその生前よりもさらに高められていく場合もあった。そうした権威と影響力とは、ある場合には、その聖者の思想や言動、あるいは彼の行なったとされるカラーマツト *Kalamat* (奇跡) やその他さまざまな言動に関する伝承を通して高められ、それに応じて、その聖性乃至は擬似的な聖性もさらにつよめられていったのである。これについては、信奉者の手になる「マルフーズ」*mafiiz*・「タズキラ」*tazkirah* (対話集・伝記) などいわゆるスーフィー宗教文献が大きな役割を果したということができよう。

しかし、同時に、その権威の影響が、とくに民衆レベルにおいて具体的にあらわされたのは、ほかならぬダルガーに
おいてであったと、私は主張したい。ダルガーにおいては、当該聖者をはじめ、その他の聖者の墓を中心に、それぞ
れ「ウルス」¹⁾、²⁾すなわち命日の祭礼が年に一回行なわれ、多くの信奉者や民衆をあつめてきた。また、ダルガーは、
異教徒たるヒンドゥーも含めての集会の場であり、貧者に対する施与が行なわれる福祉の場としても機能した。要す
るに、ダルガーは、せまい意味の「墓地」・「聖地」としての宗教性を持つ場としてばかりでなく、まさにその聖性の
もつ宗教権威の故に、ときには社会や政治の面における力関係を左右し得る重要な歴史の意味を持つことになるので
ある。ムスリムが少数者としての社会的立場をつづけてきたインドにおいて、スーフィー教団の活動がダルガーを拠
点として今日に至っていることも、そうした事情を示すものといえよう。本稿は、そうした見地からのダルガーの歴
史的意義を実証する一つの試みとしての意味も持ち得ると思う。

ところで、インドの歴史学界においては、二十世紀前半以降、インドにおけるスーフィーズムの展開についての研
究が精力的に行なわれてきた。それについては、とくに、モハンマド・ハビブ *Mohammad Habib* とその弟子ハ
リーク・アフマド・ニザーミー *Khaliq Ahmad Nizami* に代表されるアリーガル・ムスリム大学の研究者たちの業
績に負うところが多い。³⁾ この人びとは、スーフィー関係の諸文献を渉猟・紹介・解説し、またインド史におけるスー
フィー聖者の思想と実践等についてのすぐれた研究成果を公けにしてきた。とりわけ、さきに挙げた二人は、ムスリ
ム権力に対するスーフィー聖者の姿勢の持つ思想的・社会的意義を明らかにした点で、中世インド史の研究に大きな
寄与をしてきたといえる。しかしながら、これらの研究者の事実認識や解釈またはその叙述の視点は、ときとして、
宗教文献のもつ内容と性格とに引きずられてしまう傾向がないとはいえない。ただ、それに対して正面きって反論す

るわけにもいかない。というのは、多くの場合、このようなスーフイー文献に基づく「史実」の内容を、他の文献史料によって裏づけ、補強する、あるいはそれを批判し、否定するに足る史料がないことが多いからである。

私は、一九五九年以来、「東大インド史跡調査団」に加って、山本達郎(団長)・月輪時房両氏らとともに、サルタナット時代に属するムスリム系建造物の研究を進めてきた。⁽¹²⁾この共同研究では、ダルガーは直接の課題には含まれていなかったのであるが、二回にわたる現地調査(一九五九一六〇、一九六一一六二年)の過程において、私自身、ダルガーの持つ歴史的意義を次第につよく認識するようになり、それとともに、ダルガー内外に現存する諸種の遺跡に大きな関心を持つに至ったのである。一九七一年の夏、東京外国語大学の主催する「インド・パキスタンにおけるヒンドゥー・ムスリム両教徒の宗教生活」に関する学術調査(団長土井久弥氏)に参加して、黒柳恒男・鈴木斌・田中敏雄・長崎暢子らの諸兄弟とともに、パキスタン・インドの各地のムスリム史跡を回ったときにも、このような視角から、いくつかのダルガーを訪れ、観察し、資料を集めてきたのであった。そして、一九七三年の夏の第二次調査に際しては、鈴木斌氏とともに、ふたたび、インドのデリーおよびその他の地におけるダルガーを訪れる機会を得て、さらに調査研究を一步進めることができた。そうした過程で、ダルガーの研究に関して私たちの持ったさまざまな課題のなかで、私は、建造物に関する調査をも一つの柱と考えてきたのである。

一般的にいつて、サルタナット・ムガル時代に関するスーフイー関係の宗教文献においても、十九世紀中葉に至るまでは、ダルガー内外の建造物についての言及は、きわめて稀れである。したがって、デリー地域に現存する数多くの遺跡や建造物に関する限り、同時代乃至はそれに近い後代の文献によって、その資料としての価値を補強することも、ふつうにはきわめて難しい。若干の外国人旅行者の手になる同時代あるいは後代の記録の類がこの点に関して役

に立つところがあっても、その対象は、これまた、きわめて限られている。

しかしながら、十九世紀中葉になると、幸いにして、われわれは、デリーの建造物についての重要な資料を、著名なムスリム文人のウルドゥー語による著作のなかに見出すことができる。すなわち、サイイド・アフマド・ハーン Sayid Ahmad Khan の『王たちの遺したゆ』*Āthār al-Sandīd* がそれである⁽¹⁴⁾。この書物には、デリーにおけるいくつかの著名なスーフィー聖者のダルガーについて、その歴史的背景や伝承と、ダルガー内域に残っていた建造物に関する簡単な記述とが含まれている。また、十九世紀前半から二十世紀にかけて刊行されたイギリス人を主とする西欧の人々の手になるいくつかの旅行記や報告書の類も、それぞれの筆者による当時の貴重な観察記録を、これまた、概してきわめて簡単なながらも、残してくれている⁽¹⁵⁾。さらに二十世紀の十年代に入ると、デリーの建造物に関するきわめて貴重な文献が、二種類、印刷に付された。その一つは、バシール・バシール・バシール・バシール Ahmad によるウルドゥー語の『首都デリーのごとく』*Wāq'at-i Dār al-Hukūmat-i Dillī* であって、ときにオリジナリティーにおいて欠ける部分も多くあるにせよ、他の書物には紹介されていないマイナーな遺跡や建造物も含まれていて、今日からすれば、きわめて貴重な資料といえるのである⁽¹⁶⁾。

他の一つは、インド政府の考古調査局 Archaeological Survey of India (以下「ASI」と略称) が部内用に刊行したデリー地方におけるヒンドゥー・ムスリム遺跡目録である⁽¹⁷⁾。私も共著者の一人である東洋文化研究所刊行の三冊の報告書『デリー・デリー諸王朝時代の建造物の研究』(一九六七・七〇年刊)に盛られた研究成果も、このインド考古調査局による右報告書に負うところが多い。この「リスト」は、鈴木斌氏と私とのダルガーの調査研究に際しても、最も重要な基礎資料として利用させてもらったものである。

このように、遺跡や建造物は、それ自体、歴史の復元のための重要な基礎資料として、また教や記述内容において著しい限界を持つ文献史料を補足するものとして大きな価値を有するものであるが、これらの遺跡・建造物の利用に当っては、慎重な考慮が必要であることはいうまでもない。

まず、それらの建造物の建設・造営の時代の考証・比定という難問がある。同時代の刻文・碑文が備わっている場合は（ここでも、その刻文・碑文自体の年代の考察が必要であるが）、デリー・サルタナット時代の建造物に関する限り、むしろ例外的というほどに少ない。それに、多くの場合、現存する建造物は、補修あるいは改築などの後代の改変を経ていることが多い。したがって、デリーの建造物の場合、その時代考証には一般に大きな困難をとまらう。さいわい私自身、『デリー』全三巻の報告書、とくにその第一巻「遺跡総目録」を作成する過程で、諸種の建造物の構造乃至は様式上の特徴について、山本・月輪両氏の教示を得つつ、かなり詳細にわたって習得することができたので、建造の時代の考証・比定に関して若干の知見を持ち得るに至ったのである。そのうえで見てみると、アフマド・ハーンやバシル・ディーン・アフマド、あるいは前述のインド考古調査局の「リスト」に述べられている建造年代の考定についての記述にはかなりの疑問を抱かざるを得ない建造物が決して少なくはないこともわかったのである。本稿とそれにつづく同種の研究においては、デリーの建造物の調査研究の過程で得た経験と知見とを十分に活用してゆきたいと思う。

さらに、遺跡や建造物に関する伝承と史実および客観的事実との異同・混乱という難しい問題がある。サルタナット時代の建造物の場合、刻文や碑文が、必ずしも史実や事実をそのまま伝えているとは限らない。そこに記されている内容のみならず、固有名詞や年次についても、疑わしいものがある。ダルガーに残存する墓石の銘文などについて

も同じことがいえよう。さらに、まったく違った別人の墓を、他の著名な聖者の墓にすりかえてしまった疑いのあるダルガーさえ現存するのである。⁽¹⁸⁾ とりわけ、現存するダルガーの守護者たち（インドにおいては、ふつう、ハーディム Khādim と概稱されることが多いが、とくにその首長は、サッジャーダネシン Sajjadah-nishin あるいは、ピールザード pir-zādan などと呼ばれ、その多くは、直接、間接に聖者の血統をひくものと称している）の語る聖者の事蹟やダルガーの歴史に関する伝承には、到底、事実とは思えないものもある。また、同時代のものも含めて、宗教文献、とくにスーフィー関係やダルガー所蔵の文書に記録されている伝承等についても、いわゆる史実との混同を見きわめる必要があるものが多い。「だれの墓か」「だれが建てたか」「いつ建てたか」「なんのために建てられたか」などの基礎的な問題にしても、その本来の建造物の種類や用途とともに、一応は疑問視する必要がある。とりわけ、インドのスーフィー聖者に関しては、その弟子や信奉者によって、その事蹟や教説あるいは秘蹟や神秘体験等についての文書がかなり残されているので、その記述内容を歴史学の資料として利用する場合はとくに慎重な考慮が要請されるのである。これについては、私自身、なお不勉強であり、本稿で述べる資格もない。しかし、ときには、建造物や遺跡に関する考察が、あり得べき文献の記載内容の誤謬を訂正する役割を果たすこともあり得ることをとくに記しておきたいのである。

さて、さきに触れたように、インド人・パキスタン人によるスーフィーズムについてのすぐれた諸研究においては、一般に、スーフィー聖者のダルガーに現存する建造物については、ときにそれに言及することはあっても、それらを研究・考察の基礎資料として活用したひとは、これまでほとんどなかった。さいわいにして、私は、前述の如く、数回にわたってデリーに赴く機会を得、近年は、鈴木斌氏というすぐれたウルドゥー文学の研究者とともに、再度、デリーをはじめインド亜大陸各地のダルガーを見て回る機会にめぐまれた。そこで、今後、本稿を最初の出発点とし

て、すでに記したような方法をも用いて、いくつかのダルガーに関する研究を発表してゆきたいと思う。その際、諸種のウルドゥー語文献の蒐集と読解については、鈴木氏に負うところがまったく多かつたことを、謝意とともに、あらかじめ、記しておきたいと思う。

ところで、すでに紹介したデリーにおける三人のチシュティー派聖者のダルガーのうち、クトゥップ・サーヒブとシエイフ・ニザームディーン・オーリヤーのそれは、かなりひろい区域をもち、ダルガー内域はもちろん、その外域や周辺地域には、多くの数にのぼる諸種の宗教建造物が、サルタナット時代からムガル治世を経て、さらに今日に至るまで、長いあいだにわたって建てられている。したがって、それらの簡単な紹介だけでも相当な枚数を必要とする。シエイフ・ニザームディーン・ダルガーは、これらの二人のダルガーに比べれば、ダルガーそのものの規模も小さく、建造物の数も少ない。したがって、すでに記したような問題を扱う私の最初の論考としてこの聖者のダルガーを選んだのも、研究上のさまざまな支障と準備の不十分という理由によるとともに、ダルガーの規模からくる原稿の分量という問題にもよるものである。この点、他日、さきの二人の聖者のダルガーについても、研究成果を公けにしたいと考えている。

1 「聖者」という語は、本来、信仰する側からの主体的な聖性の賦与を前提として成り立つ語であると思う。したがって、私はこの語を用いる場合には慎重な配慮が必要であると思うし、ムスリムの場合、スフィーアの場合、それぞれ、別の問題も存する。しかし、本稿では、通俗的な意味で、スフィーアのピール・シェイフの一部のものに対して俗称として用いている。

2 インド史におけるスフィーズムの系譜やその歴史的概要については、さしあたって、次を参照。荒「ムスリム支配成立期における政治権力と宗教」、松井・山崎編『インド史における土地制度と権力構造』東大出版会、一九六九年、一〇七一―一六五べ

13. 荒「ムスリム支配下における宗教と政治権力」、岩波講座『世界歴史』第十三巻、三九七—四三六ページ。黒柳恒男「スーフィーズム」、『アジア仏教史・インド編V・インドの諸宗教』九二—一二九ページ、一九七三年。

3 ここに一々挙げないが、前掲注2荒の両論文としては引用した I. H. Qureshi, M. Habib, K. A. Nizami, Aziz Ahmad, P. Hardy などの諸論著を参照された。建造物がこれまでほとんど利用されていない例としては、たとえば、シェイフ・ナスールッディーンの場合、本稿ではしばしば依拠した、ハビーブ氏やK = A = ニザミー氏のすぐれた論考でも、ダルガーの建造物は、研究資料としてまったく使われていない。ニザミー氏の論考(第二章注1参照)も、ダルガーについては、十八世紀のカーニステイヴン(本章注15)のまじり引きの文章を引用しているのみである。

4 Hamilton Gibb, *The Mohammedanism*, New York, rev. ed., 1962, pp. 160. キブ『イスラム文明』、加賀谷寛訳、一九六七年、一七八—一七九ページ。

5 ハンカーの『』は K. A. Nizami, *Some Aspects of Khangah Life in Medieval India*, *Studia Islamica* Ex. fasciculo VIII, 1957, pp. 51—69.

6 荒「ムスリム支配成立期における政治権力と宗教」、二二—二三ページ参照。

7 われわれは、「聖者」「神秘主義」という語から、スーフィーの活動を、とかく人里離れた静寂な地での修道、あるいは隠遁的修道を想像する。しかし、スーフィーのピールのなかには、都市の民衆の居住地域のなかにじかに入りこんで、ハンカーを構えたものも多かったのである。

8 「ローシヤネ=チラーゲ=ディフリー」Rausani-Chirāgh-i-Dihl というタイトルの起源については種々の説があるが、ここでは省略する。ただ、このシェイフと同時代の人びとは、またこの称号を使っていたらしい。Mohammad Habib, Shaikh Nasruddin Mahmud Chirāgh-i-Dehl as a Great Historical Personality, *Islamic Culture*, April, 1946, p. 129, n. 1.

9 この『』は『』、たゞは、Ja'far Sharif, *Islam in India, or the Qānūn-i-Islām*, tr. by G. A. Herklotz, ed. by スーフィー聖廟の發展と建造物の造營

William Crooke, London, 1921, pp. 144~145 を参照。私は、インドのムスリム社会において、何故、いわゆる「墓崇拜」が一般化したかについて、特殊インド的な宗教的・社会的背景があると考えている。いずれ公表したい。

- 10 *Ibid.*, p. 144.
- 11 この二人の代表作を挙げれば、たとえば次があげ。Mohammed Habib, *Chishti Mystics Records of the Sulanate Period, Medieval India Quarterly*, Vol. 1, No. 2, Aligarh, 1950, pp. 1~42. Khaliq Ahmad Nizami, *Some Aspects of Religion and Politics in India during the 13th Century*, 1961, New Delhi. K. A. Nizami, *Tarikh-i-Mahāshahi-Chishti*. (in Urdu), 1953, Delhi.
- 12 山本・月輪・荒『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』全三巻、東大東洋文化研究所刊、一九六七〜七〇年が、公式な共同報告書である。
- 13 第一回調査（一九七一年）の際の図書目録は、鈴木斌・田中敏雄両氏の努力により、左記のタイプ印刷による文献目録が刊行された。イスラーム関係文献は、このうち、ウルドゥー語二四八冊、英語二三冊、ペルシア語二一冊、アラビア語一三冊、ヒンディー語二冊である。第二次調査（一九七三年）の際にも、ウルドゥー・ペルシア語文献を、多数、蒐集し得た。東京外国語大学・東京大学東洋文化研究所合同海外学術調査団『昭和46年度インド・パキスタン宗教調査関係文献総目録』一九七三年、東外大刊を参照。
- 14 Saiyid Ahmad Khān, *Āthār al-Sandīd* (in Urdu), Lakhnau (Lucknow), 1847 (1st edition), 1854 (2nd revised edition).
- 15 その評価は、『デリー』第一巻、第三章「建造物に関する従来の諸研究」（荒執筆分）、二五―三八ページを参照。本稿で引用したものに次があげ。Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, Ladhiana, [1876].
- 16 Bashir al-Din Ahmad Dihlawi, *Waqī'at-i-Dār al-Hukumat-i-Dihli* (in Urdu), 3 vols, Dhli, 1919.

17 Archaeological Survey of India, Delhi Province. List of Muhammadan and Hindu Monuments. Vol. I, Calcutta, 1915~16; Vol. II, Calcutta, 1919; Vol. III, Vol. IV, Calcutta, 1922.

18 たとえば、十三世紀にデリーにおいて活動したと推定されるシャーヘ・トウルクマーン Shah-i-Turkman Bīyāhāni の墓は、デリーの旧シャージャハーン・バードのトルコマーン門の北方に現存するが、現在、そこから約一〇〇メートルほど南方の地点の他のムスリムの墓が、誤って、ひろく、この聖者のダルガーと考えられている。これについては、ダルガーの伝承の誤伝、ダルガーそのものすりかえの好例として、いずれ、紹介したい。

二 シェイフ・ナスイルッディーンとトゥグルク支配層

シェイフ・ナスイルッディーン・マフムードの生涯とその活動については、同時代あるいは後代のいわゆる史書からは、ほとんどなにもをも知ることができない。しかし、彼のムリードの一人でこの聖者に接することの多かったハミード・カラन्दール Hamid Qalandar なる人物がシェイフの対話をまとめた『ハイルル・マジャリス』*Khair al-Majalis* というペルシア語の文献⁽¹⁾によって、ある程度、彼の前半生やその後の宗教的実践についてのことをうかがうことができるのである。近代になってからの研究としては、主としてこのハミード・カラन्दールに拠ったところの故モハンマド・ハビブ氏の「シェイフ・ナスイルッディーン・マフムード・チラーゲ・デリー」⁽²⁾および、上に紹介した『ハイルル・マジャリス』の最初のペルシア語刊本(アリーガル版)に付せられたK・A・ニザミー氏執筆の「シェイフ・ナスイルッディーン・チラーグの生涯」(本章注1参照)がままとまっているが、ニザミー氏の他の諸論著にも随所に言及されている。次に、主としてこれらの論考に拠りつつ、若干の私見をいれて、こ

の著名なチシュティイ派スーフイーの指導者の生涯について、簡単に紹介しておきたい。

シェイフ・ナスィールッディーンの祖父はラホール地方で生まれたらしいが、その後、一族はアウド地方に移住し、彼が生まれたのもアウドの地である。⁽⁴⁾彼は、九歳のときに父を失ったが、その後も敬虔なムスリムとしての教育を受けつづけたという。しかし、二五歳のとき、親族の希望に反して、スーフイーとしての道を進むことをみずから決心したらしい。ただ、彼がサルタナットの首都デリーに来たのは、その母が死んでからのちで、すでに四三歳のときだったという。デリーでは、彼は、シェイフ・ニザームッディーンのジャマーアト・ハナに入って、そのムリードとしての修行の道を踏み出したのである。

次章において、この聖者のダルガー内域に現存する彼の甥のものときれる墓に言及するので、ここで、その姉妹およびその親族について記しておきたい。妹のビービー・ラホーリー Bibi Lahuri はききに死に、その息子のカマーッディーン Kamāl al-Dīn は、シェイフの姉のビービー・ババディー Bibi Buba-badi に育てられたという。この姉にもザイヌッディーン・アリー Zain al-Dīn 'Alī と呼ぶ息子があつた。これら二人の甥、すなわちカマーッディーンとザイヌッディーンとは、いずれも、シェイフ・ナスィールッディーンが死ぬときまで、彼と生活を共にしていたという。

彼は、デリーに来てからのちも、その地とアウドとのあいだを往来していたらしい。当時、デリーのシェイフ・ニザームッディーンのジャマーアト・ハナには多くの人びとが集つてきていたらしく、そのため、ナスィールッディーンは、マウラーナー・ブルハヌッディーン・ガリーブ Maulāna Burhan al-Dīn Ghariḥ の家に寄居することが多かったという。この人物は、同じくシェイフ・ニザームッディーンのムリードで、のちにデカン地方にチシュティイ

派の活動の基盤をつくった一人であるが、彼の家が、デリーのどのあたりにあったかはわからない。ただ、シェイフニザームッディーンの修道の拠点となっていたギヤースプルからはかなりの距離にあったということである。

シェイフニザームッディーンは、七二五AH年のラビーⅡ月18日に死んだが、その三ヶ月ほどまえに、彼のハリーフア(後継者)のための証書すなわち「ヒラーファトニナマ」*khilafat namah* を用意させたという。その証書を受けた最初の人物は、のちにハーンスィー *Hansi* で活躍したシェイフククトッブッディーンニムナッワル *Shaikh Qutb al-Din Munawwar* であり、第二の人物が、ほかならぬナスィールッディーンニマフムードであった。彼は、その後、やはりシェイフニザームッディーンの後継者の一人であるシェイフニシャムスッディーンニヤヒヤー *Shaikh Shams al-Din Yahya* とともにデリーにとどまって、修道をつづけたのである。

シェイフニザームッディーンの死後、そのジャマーアトニハーナは彼の姉の子孫たちによって相続されたので、シェイフニナスィールッディーンは、別の場所にその修道の拠点を置いたらしい。それが、デリーのどの土地であったかは記されていないが、Mニハビープ氏は、今日彼の墓が立っている土地に家を構えてそこを住居としたと述べている。すでに触れたように(本稿七ページ)、インドにおけるスィーフイ聖者の場合には、その死後、彼の修道の拠点であった地にその墓を造営する例が多かったところからすると、このハビープ氏の指摘もまずは正しいと考えていいかもしれない。⁽⁶⁾しかし、あとで述べるように、ムハンマドニシャーニトウグルクの治世には、デカンにおける第二の首都の造営ということもあるので、前代までの他の聖者の場合のように簡単には論断できない。これについては、また、のちに触れたい。

シェイフニナスィールッディーンは、八二歳の生涯を終えるまで、デリーを修道の拠点とし、そこに住みつづけて

いたものと思われる。しかし、シェイフナスィールッディーンの場合には、それまでのスフイーの場合と異って、デリーにそのまま住みつづけることは決して容易なことではなかったと思われる。トゥグルク朝の第二代のスルターンたるムハンマド・シヤールは、七二七AH年すなわち一三二六—二七年に、彼の帝国の第二の首都ダウラターバード Daulatabad をデカンの一角旧デーヴァギリ Devagiri の地に建設し、首都デリーの住民の移住をも強制するという政策を打ち出し、デリー在住の宗教者にも、デカンへの移動をすよく求めたといわれているからである。しかし、このような状況のもとで、ナスィールッディーンが直面した困難を理解するためには、若干の説明、とくにそれまでのデリーにおけるサルタナット支配層とスフイー聖者、それもデリーを主要な拠点としていたチシュティ派指導者たちとの関係についての説明を少しく記しておく必要があると思う。

ズィヤーウッディーン・バラニーは、その著『フイーローズ・シヤールの歴史』のなかで、シェイフ・ファリードゥッディーン（ハーバー・ファリード）が、デリーへ行くためにアジューダン Ajodhan を去ろうとしたスフイーの一人サイディ・マウラー Sayyid Maula に告げたものとして次のような言葉を記している。

「私の忠告を一つ心に留めておけ。王や貴族たち [mulūk wa umarā] と交わらないようにせよ。そして、そのものたちが自分の家にやってくるのを災厄 [malikāt] と考えよ。王や貴族たちと交わりの扉を開くところのすべてのダールベシユたちは破滅をするものである。」⁽⁷⁾

この言葉のいわんとするところ、すなわち世俗的な権力の所有者たる王や支配層とは交渉を持つことなく、でき得る限りそれから離れているべきであるということが、インドにおける初期のチシュティ派の指導者の考え方であった。具体的には、たとえば王が施与するところの土地は受けない、あるいは体制内の官職 (シュグル Shughl) にはつ

かない、などが守るべきこととして説かれ、チシュテイー派のシェイフラによって実践されてきたのである。とくに、シェイフリナスィールッディーンの師たるシェイフリニザームッディーンは、こうしたことについてはかなり厳しい態度をとったといわれている。そのため、デリーがトゥグルク朝の支配下にはいつてからは、初代のスルターンたるギヤースッディーン Ghyath al-Din とその後継者スルターンムハンマドゥシャーと、シェイフとの関係が、ときに著しく緊張の度を加えたことは、すでにさまざまの書物や伝承のなかにくり返し説かれてきたところである。⁽⁸⁾

ところで、すでに触れたように、ムハンマドゥシャーはトゥグルクは、デリー地域の住民たちをデカンの新首都ダウラターバードへ強制的に移住させるにあたって、スーフィー聖者の多くに対しても、デカン地方への移住とその地における布教をよく奨めたといわれている。⁽⁹⁾ 事実、チシュテイー派のスーフィーたちをも含めて数多くの宗教者がデリーを去っていったことは、ややのちにデリーの宮廷に滞在したイブン・バットウータ Ibn Battuta やズィヤールウッディーン・バラニーも記しているところである。⁽¹⁰⁾

そればかりではない。ムハンマドゥシャーは、トゥグルク朝の支配体制下にあつた法官やウラマーはもちろん、直接にはその支配のもとに組み入れられていなかったスーフィー修道者に対しても、スルターンの政策の支持者たらしめんと努めたという。ムガル時代の歴史家フリシタの記すように、シェイフリナスィールッディーンをして宮廷内におけるスルターンの日常生活に関する仕事を扱う職につかせたとするのは誤りであつたとしても、⁽¹¹⁾ 専制をもって知られるこのスルターンが、首都在住の多くの民衆にまで影響力を持つようになっていたスーフィー指導者たちを、彼の支配貫徹の道具として利用しようとしたことは、まことに想像するに難くないところである。⁽¹²⁾

スルターンとシェイフとの関係は、ムハンマドゥシャーがホラーサーン遠征のための軍隊を派遣しようとするに際

して、シェイフ・ナスィールッディーンをその宮廷に喚問したときに緊張の度を加えたと推定される。このときのスルターンの意見聴取に対して、シェイフがそれを婉曲に拒んだために、スルターンは著しく不満であったといわれている。この話が果して事実であったかどうかはよくわからない。このことについては、当時のスーフィーの言行を伝える貴重な文献であるトゥグルク朝時代の『スィヤールル・オーリヤー』*Siyar al-Auliya'* に記されているという。しかし、同時代のズィヤーウッディーン・バラニーは、このスルターンが「何人かのウラマーやシェイフたち」を含む宗教者や高官たちを喚問したことは伝えていても、シェイフ・ナスィールッディーンの名についてはまったく触れていない⁽¹³⁾である。

さて、このスルターンは、遠く首都を離れた地にあつても、ときに応じて、デリーから宗教者を召喚するようなこともしていたらしい。彼は、その晩年に、反乱を鎮定するために、みずからデリーを離れてタッター（現在のパキスタンのシンド地方の都市）の地に赴いたのであるが、『スィヤールル・オーリヤー』は、シェイフ・ナスィールッディーンがこのときもデリーからスルターンのもとに赴いたことを記している⁽¹⁴⁾。しかし、そのシンドの地において、スルターン・ムハンマドはついにこの世を去った。それは一三五一年のことで、同じ年、彼のあとを継いでスルターンに即位するのが、フィローズ・シャー（在位一三五二—一三八八）である。

ところが、このスルターン・フィローズ・シャーの即位に際して、ズィヤーウッディーン・バラニーは、シェイフ・ナスィールッディーンについて興味あることがらを記している。すなわち、そのとき、さまざまな人物が集まつてフィローズ・シャーのもとに赴き、声をそろえて、彼こそが、この世を去ったスルターン・ムハンマド・シャーの後継者であると告げたという一節で、そこに集まつた人びとの名のなかに、「マフドゥームザーダーアッパースィー、

エジプトのシェイフツシエイユーフ、シェイフナスイルッディーンマフムードアワディー、およびウラマ
ー、マシヤーイフギヨウ……Makhdūnzāhāh 'Abbāsi wa Shaikh al-Shaykh-i-Misri wa Shaikh Naṣir al-Dīn
Maḥmūd Awadhī wa 'ulama wa mashāikh……」とどうやうに記されているのである。これが、スーフィー文献
に特徴的な「マルフーズード」すなわち対話集ではなく、同時代のいわゆる史書の記述である点は注目すべき点で
あろう。このバラニーの記述は、あたかもシェイフナスイルッディーンが、他の宗教者たちとともに、スルター
ンシムハンマドシジャーの急死の直後の動乱期に際して、フィーローズシジャーを後継のスルターンに擁立すること
に努力していたような印象をつよく与えるものである。もしそれが事実だとすれば、このことは、もともとスルター
ンや支配層との関係・交渉を拒否してきたとされるチシュティ派のシェイフの行動としては、スーフィー関係の文
献が説くところときわめて矛盾するものと考えられるからである。

ムガル朝の第三代皇帝アクバルと同時代の歴史家アルバダーウーニー Al-Badā'ūnī は、いかなる文献・伝承によ
ったかは不明であるが、このときのことからについてさらに一步つき進んだ見解を述べている。すなわち、歴史叙述
においてしばしば他の著者とは異なる見解を提示するこの歴史家は、「マフドウムシエイフナスイルッディ
ンニチラーゲッデリーが、スルターンシムハンマドの不在の間に、マリクフィーローズを、秘かに〔mihān〕皇帝
〔padshah〕にしようとして運動し、ためにスルターンシムハンマドが、「この二人のピールとムリード」つまり師たる
シェイフナスイルッディーンと弟子たるフィーローズとを逮捕させ、デリーから野営の地まで連れてこさせた
16) いうのである。このアルバダーウーニーの記述は、もし事実とすれば、他の文献や伝承の記述をひっくり返してし
まうほどの重要な史料といえる性格のものである。しかし、はるか後代のムガル時代の史書でもあり、他にそれを支

持する史料はないところからすると、そのまま信じるわけにもゆかない。しかし、さきに紹介したところの同時代のバラニーの記するところからみても、シェイフナスールッディーンマフムードが、それまで、シェイフたちにかなりの圧力を加えていたと思われるスルターンムハンマドの急死のあとを受けて、おそらく、個人的にはこの聖者を崇敬し、ムハンマド・シャーの施政に批判的であったと思われるフィローズ・シャーのスルターン位継承について、かなりの関心を抱いていたであろうということは、十分、推測し得るところである。この点については、次章において紹介するように、シェイフナスールッディーンのダルガーの内外にフィローズ・シャー治世も含めてトゥグルク朝後期の建設と推定し得る建造物が、相当数、存在している事実と関連するものとして重視したい。

ところで、シェイフナスールッディーンの対話を記録した『ハイルルマジャリス』は、スルターン・フィローズ・シャーについてはその名をまったく記していないという。Mハビブ氏は、それについて、「彼〔すなわちスルターン・フィローズ・シャー〕のことは、言及するに値しなかつたのだ」とただし書きを加え、さらに、「それら〔つまり対話集〕は、フィローズ・シャーとその官僚たちの体制の間におけるこの国の状態に対する容赦なき批判を包含している」として、シェイフナスールッディーンとスルターン・フィローズとの接触も否定する見解を記している。こうした見解は、のちのK・A・ニザミー氏も支持し、シェイフナスールッディーンがフィローズ体制とも政治的関係を持たずに、権力と離れるというチシュテイー派の姿勢を守ったと記している。⁽¹⁷⁾この点に関しては、私は、ハビブおよびニザミー両氏の見解に、そのまま従うことに若干のためらいを感じる。むしろ、のちに述べるように、私自身は、それについてかなり批判的な見解を持つものである。スルターン・フィローズ・シャーは、前代のスルターン・ムハンマドの政策の行き過ぎによる社会的・経済的破綻を是正すべくさまざま

政策を採ったが、スーフィーに対しても多大の尊敬の念を示し、彼らの宗教的実践に対してもさまざまな援助を行なった。たとえ、それらは、スルターン・ムハンマドに対してかなり批判的であり、フィーローズ・シャーフをつねに讚美するバラニーの叙述に基づくところ多いという点を考慮に入れたとしてもやはり指摘し得るところだと、私は考えられている。一般的な都市や宮廷、その他の建造物の造営に著しい関心と興味とを示したスルターン・フィーローズは、さまざまな宗教施設の建設にも大いに力を尽くしたのである。スーフィーの文献や、同時代のシャムセ・スィラージ・ム・アフイーフ *Shams-i-Siraj 'Afi* による『フィーローズ・シャーフの歴史』*Tarikh-i-Firuz Shaha* から、その事実はよく知ることができるのである。また、このシャムセ・スィラージ・ム・アフイーフの史書に拠りつつ、K・A・ニザミー氏は、フィーローズ・シャーフが、スーフィー聖者たちが彼らのハーンカーにおいて自由な生活を送ることを容認し、彼らに対して大きな崇敬の念を払っていたことを強調している。こうしたスーフィーのなかには、当然のことながら、シェイフ・ナスィールッディーン・マフムードやその信奉者たちも含まれていたとみて、きわめて自然であろう。実際、デリーにおけるこのシェイフのジャマアト・ハーナは、一日中、あらゆる種類の訪問者で賑わっていたことが、スーフィー諸文献の記載からもよくうかがわれるのである。⁽²¹⁾ ハミード・カランドールが『ハイルル・マジャールリス』を編纂しはじめたのも、そのころのことだったのである。

しかし、その『ハイルル・マジャールリス』ができあがってからしばらくのち、一人のカランダールによるシェイフ・ナスィールッディーンの襲撃事件がおこった。しかし、本稿では、ほとんど関係がないので、それについては省略しておきたい。この突発事件からはぼ三年のち、七五七AH年のラマザン月十八日（一三五六年）に、シェイフ・ナスィールッディーンは、八二歳でこの世を去ったのである。

シェイフ・ナスィールッディーンが、ヒラーファト・ナーマすなわち後継者のための証書を、なんびとにも与えなかったというのは正しくないと、Mハビブ氏はいつている。しかし、シェイフ・ナスィールッディーンが、その師のニザームッディーン・オーリヤーのように、何人もの後継者をつくらなかったこともまた事実であった。Mハビブ氏は、甥のザイスッディーンがシェイフの求めによってその後継者のリストを提示したとき、シェイフは、そのなかからハリーフアを選び出すことを拒んだという。そして、彼らにとっては、自分たちの信仰の重荷を背負うだけで精一杯であり、他のひとたちの重荷までをも背負うことはできないと述べたという。これらのことについて記したのち、Mハビブ氏はその論文の末尾において、「こうして、アジメールのシェイフ・ムイヌッディーンとともにはじまった全インドのチシュティ派聖者たちの偉大なる系譜は終りを告げたのである」と感慨をこめて記している。⁽²²⁾すでに私も述べておいたように、少なくとも、デリー地域におけるチシュティ派のスーフイーの宗教活動に関する限り、その後、すなわち十四世紀後半以降においては、クトゥブ・サーヒブ、ニザームッディーン・オーリヤーおよびここに紹介したシェイフ・ナスィールッディーンに並ぶスーフイー指導者は現われなかったのである。

1 この書は、トゥグルク朝時代の一三五三―一五四年に、シェイフの対話一〇〇を集録して編纂されたものである。この書物は、二十世紀中葉に至るまで印刷刊行されなかったが、今日では、ハリーク・アフマド・ニザミー氏校訂の刊本 (*Khair-ul-Majalis Persian text ed. by K. A. Nizami, Aligarh, [1959]*) のほかに鈴木斌氏と私が入手したものに、ラクナウ (1968) をよむカラチ (刊年不詳) の二種のウルドゥー訳本がある。Kハビブ氏は校訂のヘルシア語刊本には、タラ・チャンダ、Tara Chand 氏の序文に加えて、ニザミー氏による "Introduction" (pp. 1~34), "Life of Shaikh Nasir-u-d-dim Chiragh" (pp. 35~62) とが冒頭に付せられている。

なお、スーフイー文献については、前章で紹介した (補注11参照) Mohammed Habib, Chishti Mystics Records of the

Sultanate Period. を参照。『ハイルル＝マシヤール』については、その三二六ページを参照。

2 Muhammad Habib, Shaikh Nasiruddin Mahmud Chiragh-i-Dehli as a Great Historical Personality, pp. 129~153.

3 たゞしが、英文のものについては次を参照。Khaliq Ahmad Nizami, Early Indo-Muslim Mystics and their Attitude towards the State, *Islamic Culture*, Oct., 1948, pp. 1~12; Jan. & April, 1949, pp. 1~9; July, 1949, pp. 1~9; Oct., 1949, pp. 1~10; Jan., 1950, pp. 1~12. K. A. Nizami, *Some Aspects of Religion and Politics in India during the Thirteenth Century*.

4 彼は、後代には、デリーの名をうけて呼ばれるようになった。同時代のズィヤウッディーン＝ムラニーの『フイローズ＝シヤールの歴史』には、スルターン＝フイローズ＝シヤールの即位に際して彼の名が一個所だけ出てくるが、そこでは、*「シキイフ＝ナスィールッディーン＝マフムード＝マフディー（Awadhī）」*と記されている。Ziyā' al-Dīn Baranī, *Tārīkh-i-Firūz Shāhī*, Persian text, Bibliotheca Indica, 1862, Calcutta, p. 535.

5 M. Habib, op. cit., p. 136.

6 一九一〇年代のハシールッディーン＝アフマドは、シキイフが八二歳でマキールに襲われるときまで、「葬られている場所の近く、キルキー Khirki 村落の小屋（*ノシヤフ buyah*）に住んでゐた」と記している。Bashir al-Din Ahmad, *Waq'at-i-Dār al-Hukūmat-i-Dihli* (in Urdu), 3 vols, vol. III (1919), p. 92. 今日、キルキー部落には、シキイフ＝ナスィールッディーンのマジュラ、あるいはキッラーガーとかハンカーと称する遺跡は、私の調査した限りではどこにもなかった。私の推測では、ハシールッディーンは、アフマド＝ハンとカー＝スティヴン Carr Stephen を写すことが多いため、『ブリー』第一巻、三五ページ、荒執筆稿を参照）、*「彼は、キルキーの村に近く、それまで住んでいた部屋に埋葬された」というカー＝スティヴンの叙述を少し変えて写したのである。ただし、カー＝スティヴンの方は、前後の文脈から明らかのように、その場所は、現在のダルガーのある地をいっているので、これは、ハシールッディーンの誤解とどうもきびあう。* cf. Carr Stephen, *The*

Archaeology and Monumental Remains of Delhi Ludhiana, [1876], p. 145.

7 Barani, op. cit., p. 207, cited in K. A. Nizami, *Early Indo-Muslim Mystics*, (Oct., 1948), p. 10. なお、こうした言葉に類するものば、*新註のシーヌン*一文献に多く見出されることになり、右のニザミーの論考には、そのいくつかが紹介される。

8 M. Habib, *Shaikh Nasiruddin Mahmud*, pp. 137~139. なお、このような伝承の一例として、荒「デリー」に現存するサントナマット時代のシーヌリーの遺跡について、『東洋文化研究所紀要』第四四冊（一九六七年、二二一~二四ページ）に紹介されたシーヌン＝キヤースッシャーインとシーヌン＝ニザームシャインとの対立に関する伝承を参照。

9 K. A. Nizami, *Introduction in Khair-u'l-Majalis*, pp. 51~52.

10 K. A. Nizami, *Early Indo-Muslim Mystics* (Jan., 1950), pp. 2~3.

11 *ibid.*, pp. 3~4. M. Habib, op. cit., p. 142.

12 *ibid.*, pp. 139~140.

13 K. A. Nizami, op. cit., pp. 4~5. M. Habib, op. cit., pp. 142~143. Barani, op. cit., p. 523. なお、『シーヌン＝ヤ

シャーニク』44、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、149、150、151、152、153、154、155、156、157、158、159、160、161、162、163、164、165、166、167、168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183、184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、200、201、202、203、204、205、206、207、208、209、210、211、212、213、214、215、216、217、218、219、220、221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245、246、247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、259、260、261、262、263、264、265、266、267、268、269、270、271、272、273、274、275、276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、298、299、300、301、302、303、304、305、306、307、308、309、310、311、312、313、314、315、316、317、318、319、320、321、322、323、324、325、326、327、328、329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、345、346、347、348、349、350、351、352、353、354、355、356、357、358、359、360、361、362、363、364、365、366、367、368、369、370、371、372、373、374、375、376、377、378、379、380、381、382、383、384、385、386、387、388、389、390、391、392、393、394、395、396、397、398、399、400、401、402、403、404、405、406、407、408、409、410、411、412、413、414、415、416、417、418、419、420、421、422、423、424、425、426、427、428、429、430、431、432、433、434、435、436、437、438、439、440、441、442、443、444、445、446、447、448、449、450、451、452、453、454、455、456、457、458、459、460、461、462、463、464、465、466、467、468、469、470、471、472、473、474、475、476、477、478、479、480、481、482、483、484、485、486、487、488、489、490、491、492、493、494、495、496、497、498、499、500、501、502、503、504、505、506、507、508、509、510、511、512、513、514、515、516、517、518、519、520、521、522、523、524、525、526、527、528、529、530、531、532、533、534、535、536、537、538、539、540、541、542、543、544、545、546、547、548、549、550、551、552、553、554、555、556、557、558、559、560、561、562、563、564、565、566、567、568、569、570、571、572、573、574、575、576、577、578、579、580、581、582、583、584、585、586、587、588、589、590、591、592、593、594、595、596、597、598、599、600、601、602、603、604、605、606、607、608、609、610、611、612、613、614、615、616、617、618、619、620、621、622、623、624、625、626、627、628、629、630、631、632、633、634、635、636、637、638、639、640、641、642、643、644、645、646、647、648、649、650、651、652、653、654、655、656、657、658、659、660、661、662、663、664、665、666、667、668、669、670、671、672、673、674、675、676、677、678、679、680、681、682、683、684、685、686、687、688、689、690、691、692、693、694、695、696、697、698、699、700、701、702、703、704、705、706、707、708、709、710、711、712、713、714、715、716、717、718、719、720、721、722、723、724、725、726、727、728、729、730、731、732、733、734、735、736、737、738、739、740、741、742、743、744、745、746、747、748、749、750、751、752、753、754、755、756、757、758、759、760、761、762、763、764、765、766、767、768、769、770、771、772、773、774、775、776、777、778、779、780、781、782、783、784、785、786、787、788、789、790、791、792、793、794、795、796、797、798、799、800、801、802、803、804、805、806、807、808、809、810、811、812、813、814、815、816、817、818、819、820、821、822、823、824、825、826、827、828、829、830、831、832、833、834、835、836、837、838、839、840、841、842、843、844、845、846、847、848、849、850、851、852、853、854、855、856、857、858、859、860、861、862、863、864、865、866、867、868、869、870、871、872、873、874、875、876、877、878、879、880、881、882、883、884、885、886、887、888、889、890、891、892、893、894、895、896、897、898、899、900、901、902、903、904、905、906、907、908、909、910、911、912、913、914、915、916、917、918、919、920、921、922、923、924、925、926、927、928、929、930、931、932、933、934、935、936、937、938、939、940、941、942、943、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953、954、955、956、957、958、959、960、961、962、963、964、965、966、967、968、969、970、971、972、973、974、975、976、977、978、979、980、981、982、983、984、985、986、987、988、989、990、991、992、993、994、995、996、997、998、999、1000。

M. Habib, op. cit., p. 143.

14 M. Habib, op. cit., p. 143. K. A. Nizami, op. cit., p. 5.

15 Barani, op. cit., p. 535.

16 Al-Badā'uni, *Muntakhab al-Tawārīkh*, Persian text, Bibliotheca Indica, vol. I, 1868, Calcutta, pp. 241~242, Eng. tr. by G. S. A. Ranking, Bib. Ind., vol. I, 1898, Calcutta, p. 322.

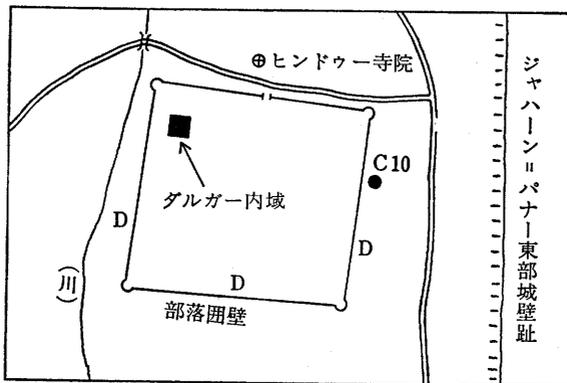
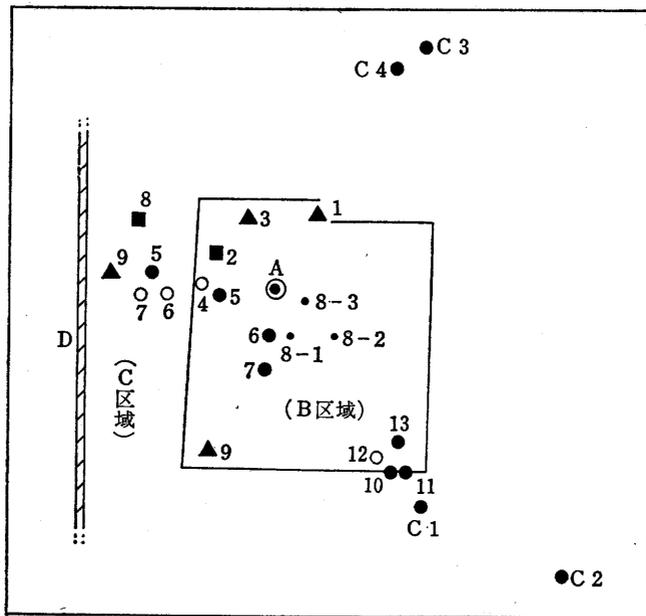
17 M. Habib, op. cit., p. 144. K. A. Nizami, *Introduction in Khair-u'l-Majalis*, pp. 58~59.

- 18 『チラー』第一巻、一九ページ（荒執筆分）
- 19 Shams-i-Siraj 'Afif, Tankh-i-Firuz Shahi, Persian Text, Bibliotheca Indica, Calcutta, 1891, pp. 330-334
- 20 K. A. Nizami, Early Indo-Muslim Mystics (Oct., 1949), pp. 6-7.
- 21 M. Habib, op. cit., p. 144.
- 22 *ibid.*, p. 153.

三 ダルガー内城とその周辺の建造物

シェイフ・フナシール・ルッディーン・マフムードのダルガーは、ニューデリー市の東南郊、城壁に囲まれたチラーグ・デリー Chiragh Delhi 部落のほぼ西のはずれ、北寄りのところにある。現在では、ところどころ崩壊し、あるいは建物により仕切られた囲壁が、ダルガーの内城をとり囲んでいるかたちである。しかし、この囲壁は近代のものであり、ダルガーの規模は、時代によって異なるものがあつたと思われる。今日、この内城に入るには、のちに紹介する表門〔O 38〕を通るのであるが、他にも、囲壁の西側東寄りのところに小さな戸口が開いている。

本稿では、挿図2の建造物の分布図に記した記号と一連番号の順に従って、まず、ダルガーの本廟すなわちシェイフ・フナシール・ルッディーンの墓を紹介し、次いで、ダルガー内城について、シェイフの本廟を囲む周辺の建物群をダルガー内城北東隅にあるダルワーズ（表門）からはじめて、北・西・南側の建造物の順序に説明し、さらに西南隅・東南隅の建物群および内城のいくつかの墓について述べる。そのあと、現在のダルガー内城の外側とそのすぐ近傍に残存する建造物を紹介し、最後に部落をとり囲む城壁に触れたいと思う。



挿図2 チラグ=デリー部落(上図), ダルガー内外の建造物の分布(下図)。

Aは本廟, Bはダルガー内域, Cは内域の外, Dは城壁を示す。

■はモスク, ○は墓地, ●は墓建築, ◦は墓, △は宗教施設。

なお、ここに紹介する建造物のうち、『デリーデリー諸王朝時代の建造物の研究』の第一巻「遺跡総目録」に収録したものについては、われわれの採用した建造物種別の記号と整理番号とを「」印の括弧内に記載しておく。⁽¹⁾

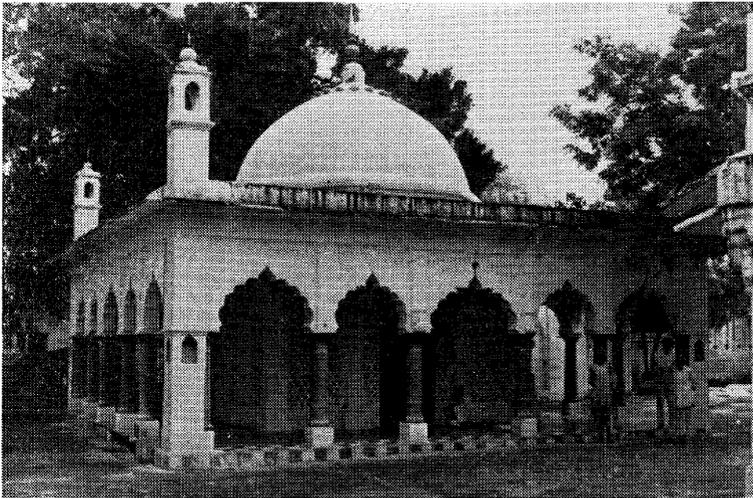
A シェイフナスイルッディーンマフムードの墓〔T 135〕⁽²⁾

「ロッシュャネチラーゲデリーのダルガー」として知られてきたこの墓は、ドームをいただく十二本柱の墓建築の周りをとり囲む回廊部分の添加によって、今日では、本来の建造物とはその外観を著しく異にしている。

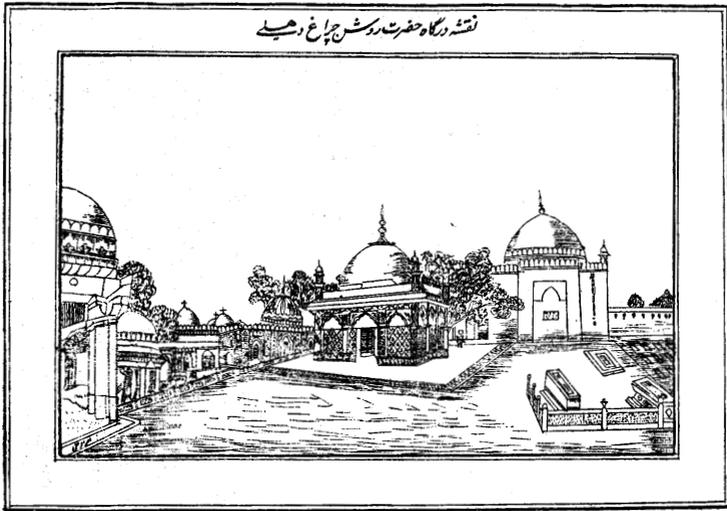
今日見るところの、各面五つの間をもつ列柱回廊部は（挿図3参照）、おそらくは二十世紀になってから添造されたものと思われる。サイドアフマドハーンの『アーサールッサーナーディード』に載せられているダルガー本廟の挿図を見ると、私の持つ初稿本（一八八七年刊本）も改稿本（一九〇六年刊本）のいずれにおいても、今日見られるような列柱を備えた回廊の部分はなく、本来のものと思われるジャーリースクリンすなわち彫りの壁のはまった、十二本柱のドームをいただく建物としてのみ描かれている。⁽³⁾当然のことながら、同書における叙述内容にも、もちろん、回廊部についてはなにも記されていない。ただ、この著者によれば、ムガル皇帝アクバルシャー二世の治世（一八〇六—一八三七年）にミルザーグラームハイダル Mirza Ghulam Haidar が、このドームの周囲に十二本の赤砂岩のダリーを造り、ニザームッディーンオリーヤールのダルガーの柱をもってきて使用したが、たいへん華奢なものであったがため十年後には崩壊してしまったと記している。⁽⁴⁾このアフマドハーンの記述は、たとえば、一八七〇年代のカーステイヴンにも、また一九一〇年代のインド考古調査局（A.S.I.）の報告書やバシールッディーンアフマドの著書にも、ほとんどそのままに写されている。⁽⁵⁾

現在、このダルガーには、みずから「ビルザーダ」を称するものが三人いて、ダルガーの管理運営上にもいろいろと問題が多いらしい。現存するダルガー本廟の建造物の由来や補修の年代等を質しても、たしかな回答は得られなかった。ASIの「リスト」が一九一〇年代の調査に基づくものであることを考えると、現存の列柱回廊部は、少なくとも一九二〇年代以降のもの、あるいはずっと新しく二〇世紀後半に再建されたものかもしれない。

さて、それでは、十二本柱のドームをいただく本来の建物は、いつの時代のものであろうか。この聖者と同時代あるいはすぐのちの文献資料の類には、それに触れたものはない。アフマド・ハーンは、「このダルガーのグンパッドは、フィローズ・シャーの命によって、彼〔すなわちシェイフ・ナスィールッディーン〕の生前の七四九AH年〔一三四八年〕に建てられた」と述べており、さらに、このシェイフが七五七AH年のラマザン月十八日〔すなわち一三五六年〕に死んだあと、そのグンパッドに葬られたことを記している。この記



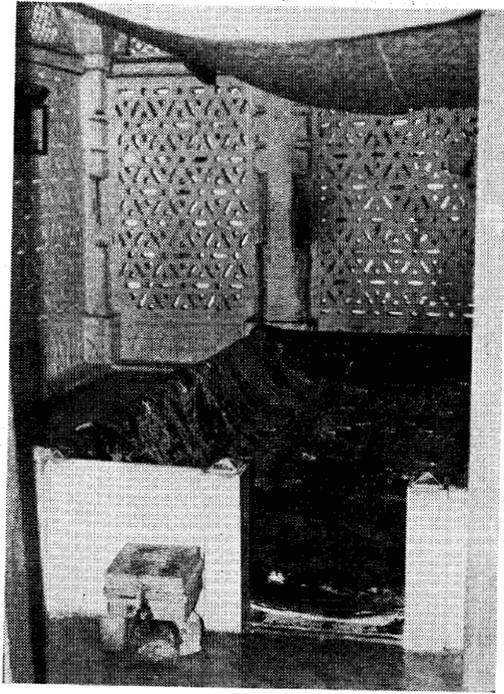
挿図3 A ダルガー本廟、シェイフ・ナスィールッディーンの墓〔T135〕。
南南西方より撮影。



挿図4 『アーサールッ=サナーディード』(初稿本・1887年刊本)
所載のダルガー内域の挿図。中央が、A本廟〔T135〕。
右手に見えるのが、B1表門〔O38〕。

述も、また、カーリステイヴンやバシルルッディーン・アフマドによって繰り返されている。しかし、フィーローズのスルターンへの登位は七五二AH年(二三五二年)のことであり、アフマド・ハーン、カーリステイヴンらのさきの七四九AH年(二三四八年)におけるフィーローズ・シャー建立説は、この点から考えても少しおかしい。もし七四九AH年とすれば、それは、フィーローズの即位前のときにあたるからである。

さて、ドームをいたたく外辺約五・七メートルの十二本柱からなる四角平面の本来の墓建築は、月輪氏と私との観察によれば、おそらくは、サルタナット中期、それもフィーローズ・シャー・トウグルクの治世以降の時代に属するものと推定される。したがって、フィーローズ・シャーの治世に建てられた可能性も十分あると考える。ただ、この聖者の生前、つまりフィーローズ即位の七五二AH年からシェイフリナス・イルッディーンが死んだ七五七AH年の間に、このスルターンが問題の十二本柱の建



挿図5 A ダルガー本廟〔T135〕内部

物を造らせたかどうかは、きわめて疑わしい。デリーに現存する他の同型の墓建築の例から推してみても、シェイフ・ナスィールッディーンの死後に造営されたと推定するのが最も妥当な推論であろう。

次項に紹介するダルガーの東北隅の表門には、その門がフィローズ・シャー治世の七五AH年（一三七三—七四年）に建てられたという記載を含む同時代のものと思われる大理石の刻文が、東面入口の上部に掲げられている。そして、このダルワーザ自体も、明らか

にフィローズ・シャー時代の建造物の諸特徴を備えている。そして、この七五AH年という年次は、シェイフの死から約十八年ほどのことである。この門の建立の時期から推すと、この聖者のダルガーの本廟たる十二本柱のグンパッドそのものが、フィローズ・シャー・トウグルクの治世に、この門の建立とほぼ前後した時期に建てられたと推定することも、十分に可能なわけである。

ところで、この建物の内部には、低い大理石の欄杆に囲まれて、大きな大理石の墓石があり、今日では、欄杆とともに美しい大きなピロイドのチャールダルで被われていた（挿図5参照）。ASIの「リスト」には、この大理石の欄杆

の南西側のパネルに刻文がはめこまれ、この欄杆がムハイユッディーン・ハーン、シャムスルウマラー、アミール・カビール、フルシード・ジャール (Muhayyuddin Khan, Shamsul Umara, Amir Kabir, Khurshid Jah) によって一三〇三年 (一八八五—六) に献納された旨が記されていた⁽⁶⁾。

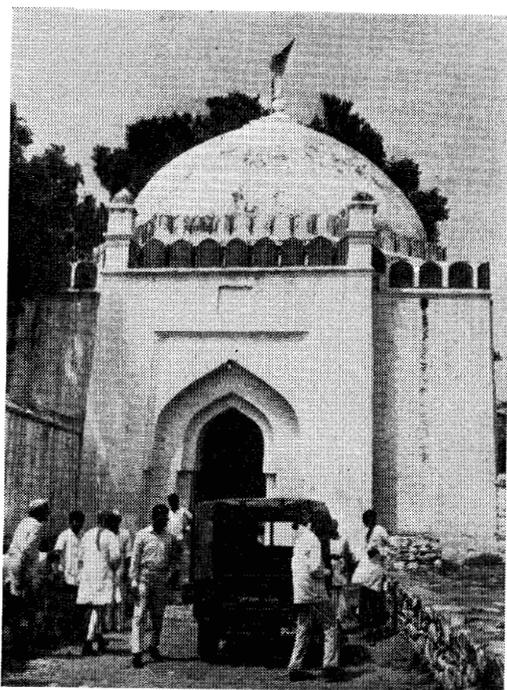
私が、一九六一年に、はじめてこの墓を訪ね、当時のハーディムらにこの刻文について質したとき、右の碑文は見当らなかつたが、彼らがいには、一九四七年の印パ分離独立前後の騒乱に際して問題の刻文は取り去られてしまつたということであつた。事実、彼らが示してくれたパネルには、刻文のとられた痕跡があつたように記憶している。

ASIの「リスト」によれば、大理石の墓石も、大理石の床とともにハイデラーバードのフルシード・ジャールによつて献納されたものであるという。この人物は、デリーにおける他の著名なチシュティ派のダルガーにも同じような欄杆を寄進していると、右の報告書は記している。現在のダルガーに住んでビールザーダを名乗る諸氏は、こうしたことがらについては、残念ながら、なにもものをも語ってくれなかつたのであるが、おそらく現存する墓石と欄杆も、「リスト」に記された当時のものとみてよいであらう。

B ダルガー内域に現存する建造物

1 ダルガーの表門⁽⁷⁾ (O 38)

ダルガーの内壁の東北隅に、東西に通路を開くダルワーズ(門)がある。その東側入口上部に、「このめでたきグンバッド」が、「アブルムムザッファル・フィローズ・シシャー」Abu al-Muzaffar Firuz Shah の治世の、「神の予言者のヒジュラの日から数えて七七五AH年の年に」建立された旨を記したペルシア語の刻文が掲げられている。この



挿図6 B1 ダルガー表門〔O38〕。東面。

東北隅の門は、スルターン・ヒーローズ・シャー時代の建造物と推定してさしつかえあるまい。ただ、なんびとの寄進あるいは建造にかかるとは、問題の刻文もまったく言及していないので、一切わからない。

2 ファルフスィヤルのモスク

この建造物は、ダルガーの内城の西北隅の近くに現存するもので、三間から成り、中央に一つのドームをいただくモスクである。この建造物に関しては、すでにサイイド・アフマド・ハーンが、ムガル皇帝ファルフスィヤル Farukh-siyar (在位一七二一—一七二九年) の時代に建てられたものと述べており、そのことは、後代のさまざまな書物や報告書に

刻文の存在については、すでにサイイド・アフマド・ハーンが記しており、また後代の諸文献もそれに触れており、ASIの「リスト」やバシル・ディーンも、その原文を載せている。⁽⁸⁾ このダルワーズは、今日、白塗りになっており、ために問題の刻文も塗りつぶされていて明瞭には判読し難い。しかし、現存するこの建造物は、その構造や様式からみると、右の刻文に記されているヒーローズ・トルク時代の建造物の特徴を、さまざまな点で示している。したがって、このダルガー

も受けつがれている。しかし、アフマドハーン自身、このモスクの建造の歴史について記したような刻文はなかったといっているところからすると、ファルフスィヤル皇帝によって建てられたということはもちろん、彼の治世の間の建造物であるということをも断定する資料は、まったくないわけである。一九一〇年代のインド考古調査局の「リスト」は、この建造物の名を「ファルフスィヤルのモスク」と記しているが、この名も、したがって、俗称と見なす方が安全であろう。

ちなみに、現在、このモスクの内部の南隅に、ちょうど寝台のようなかたちをした木製の台の如きものが置いてある。これは、「タフト」*Taft*と呼ばれており、ダルガーのハーディムたちも得意になっていっていたように、まったく一片から成る木材でできており、そこに、ナスターリクの文字で刻文があつて、一一四二AH年すなわちムガル皇帝ムハンマドハーン（在位一七一九—一四八年）の治世の第十二年という年次と、それを寄進した人物としてダークニーベグ (*Dakhni Beg*) という名が記されていたという。この「タフト」の存在と右の刻文については、すでにアフマドハーンが、その初稿本において記している。しかし、彼は、それが当時は、前項に紹介した表門〔O 38〕の前に置かれていたと述べており、また、一九一〇年代のA S Iの「リスト」の方では、本稿の次項に紹介するマジュリスハーナのなかに保存されていたと報告している⁽¹¹⁾。しかし、今日、私たちは、それをこのモスクのなかで見たので、ここに触れておく次第である。ムガル末期の珍らしい遺物として、興味がある。

3 マジュリスハーナ

この建物は、ダルガー本廟の北北西の方向、前項のモスクのすぐ北東方に残っている長方形の平面、平坦な屋根を持つ三間から成る建物である。A S Iの「リスト」は、その造営の年代をムガル末期としているが、まず正しいであ

ろう。今日では、この建物は、ピールザードを称するハーディムの一人によって住居として使用されており、バルダイを守る婦人もいたので、内部はもちろん外観もよく観察できなかった。そのハーディムも、鈴木氏や私に、この建物が、かつてはマジユリス・ハーナ majlis khannah すなわちダルガーの集会堂であったと述べている。

4 墓地〔G 33〕⁽¹³⁾

この建造物は、ダルガー本廟の西方、ダルガー内域を囲んでいる壁に沿って残っているもので、現在のチラーグ・デリーのダルガー内域に現存している唯一のガナーティー・マスジッド⁽¹⁴⁾である。墓地の西側に三つのミヒラーブと袖壁とを持つ札拝壁を備えている。A S I の報告書は、その構造の時代区分について「パタン」Pathan と記しているが、私たちは、この墓地の建造の時期をサルタナット時代末期と推定した。そして、構造と様式からみると、それも、かなりあとの時代、つまりローディー朝時代に属するものと思われる。この墓地は、A S I の「リスト」を除くと他の文献には紹介されていない。

5 墓建築〔T 124〕⁽¹⁵⁾

この墓建築は、バーバー・ファリードの孫娘の墓と伝えられるものである。直径約三・七メートルほどの六角平面のドームをいたたく六本柱から成る建造物で、ドラムの部分はかなり高くなっている。内部には一基の墓があり、一九七三年に私たちが訪ねたときには、美しい赤い色のチャードルで被われていた。A S I の「リスト」は、この墓を、誤って「八角形」と紹介している。

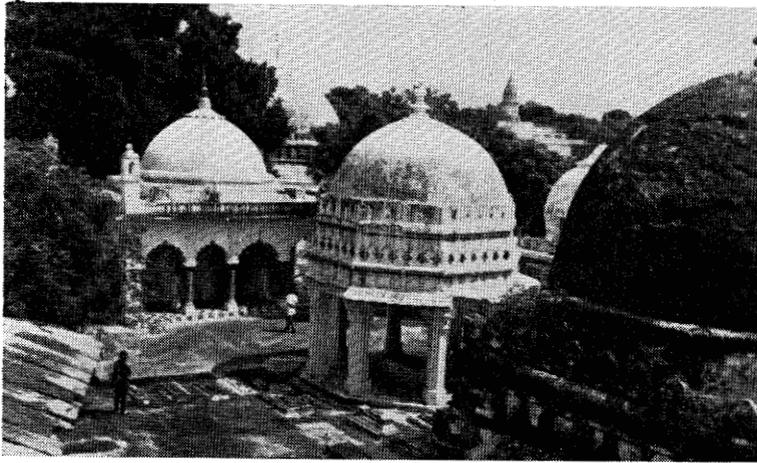
この墓建築を紹介した最初の文献は、サイイド・アフマド・ハーンの『アーサール・サナーディード』で、彼は、当時の伝承をそのまま紹介して、この「ブルジー」すなわちドームをもつ建造物には、「ハズラット・シェイフ

フリード・シヤカルガンジ Hazrat Shaikh Farid Shakargani のポーター・プー (すなわち孫娘) が眠っている」と記しており、後代のバシル・ルーディーンや ASI の「リスト」も、このアフマド・ハーンの叙述を受けている。⁽¹⁶⁾ 一九六一年、私をはじめダルガーのハーディムに会ったときにも、この墓の主については同じ説明をしており、一昨年と同様である。したがって、このダルガーを訪れる人びともそれを信じて疑わない。ただし、今日まで、ダルガーの三人の「ビルザーダ」を含めて、このバーバー・フリードの孫娘の名を明言し得るものはだれ一人としていなかったことも付記しておきたい。



挿図7 B5 墓建築〔T124〕 東北方より撮影。
右後方に、B4 墓地〔G33〕の南部分が見える。

ASI は、この墓建築の造営の時代を、例によって「パターン」としている。われわれは、かつてこの墓建築をサルタナット時代の末期(第Ⅲ期)と考えたが、しかし、次に紹介する B6・B7 などの墓建築(「T93」・「T80」と同様、中期(ただしフィロズ・シヤール時代以降)にさかのぼらせてもおかしくはない)と思う。しかし、仮りにこの墓の主を奴隸王朝時代の著名な聖者バーバー・フリードの孫娘のものとするならば、現存するこのドームをいただく六本柱の建造物は、ず



挿図8 ダルガー内域の一部 南方から撮影・手前の黒色ドームがB7 墓建築(T80), 中央の八本柱がB6 墓建築(T93), その北側はA本廟(T135), その右上のドームがB1表門(O38)。

つと後代になって建造されたということになる。私は、むしろ、この墓の主の方を疑うことも十分可能のように考えるものである。⁽¹⁷⁾

6 シェイフ・ザイヌッディーンのもと伝えられる墓建築⁽¹⁸⁾

[T 93]

この建造物は、八角平面の直径約六メートル、ドームをいたたく八本柱から成る建物で(上図参照)、中央に一基の墓が現存し、一九七一年九月に私たちが訪ねたときには、その上にチャードルがかけられていた。この墓については、サイイド・アフマド・ハーンが、その初稿本のなかで、前項の六本柱の墓建築と並んで、「ハズラットの甥 (Chanda) のマフドゥーム・ザイヌッディーン・サーヒブ Makhdum Zain al-Din Sahib の墓」として紹介している。⁽¹⁹⁾一九一〇年代のバシールッディーン・アフマドも同じ人物の墓として記しているが、ASIの「リスト」では、シェイフ・ザイヌッディーン⁽²⁰⁾の墓としてのみ紹介している。シェイフ・ナスィールッディーンには、カマルッディーン Kamal al-Din とザイヌッディーン Zain al-Din と呼ばれ、

人の甥がいたことは、すでに触れたとおりであり（前述一八ページ参照）、二人ともにこのダルガーの内域に葬られたとしても不自然ではない。ただし、決定的なことはわからない。

この八本柱の建造物は、私たちの観察では、サルタナット中期、それも、おそらくはトゥグルク朝後期に属するものと推定される。

7 墓建築〔T 80〕

この建造物は、ダルガー本廟の南方、前項に紹介した墓建築〔T 93〕のさらに南側に現存している墓で、ドームをいただく十二本柱から成り、外辺約五・八メートルの四角平面のプランを持ち、内部には、現在、一基の墓石が認められる。

この十二本柱の墓建築は、残存状態も良好であるが、A S I の「リスト」を除くと、他の文献にはまったく紹介されてはいない。おそらく、この墓に埋葬された人物の名が伝えられていなかったために、アフマド・ハーンも、さきの六本柱や八本柱の墓建築よりも規模の大きい堂々たる建造物であるにもかかわらず、紹介しなかったものであろう。

しかし、構造および様式のうえからみると、この墓建築は、ほぼ、サルタナット時代中期、とくにスルターン・フィローズ・シャー・トゥグルクの治世以降の建造物と考えてさしつかえないと思われる。さきに紹介した二つの墓建築 T 124 および T 93 とともに、トゥグルク後期の多本柱の建物の典型的な特徴を備えている。

8 ダルガー内域に散在する墓石群

シエイフ・ナスィール・ディーン・ダルガーの内域には、各所に墓石が散在する。とくに、ダルガー本廟の南方あるいは東方にかけては、露天の墓が数多く見出される。そのなかには、今日、ダルガーのハーディムたちに聞いても、

なんびとの墓であるか判明し難いものも多い。

そのなかで、これまで挙げた文献のなかに記されているもののいくつかを拾ってみると、次の如きものがある。

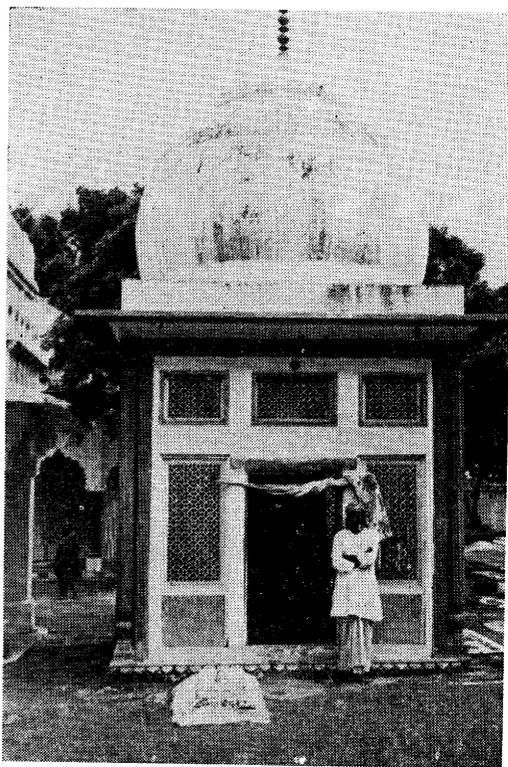
1 シェイフ・カマルッディーンの墓

この墓については、すでにアフマド・ハーンが紹介している。⁽²²⁾ ASIの「リスト」には、この墓

のまわりに、近代のジャーリースクリンがあつて、墓は、錫と木でできた屋根に被われていたと記している。⁽²³⁾

現在、この墓は、挿図9にみられるように、四角平面のドームをいたたく簡素な建物のなかに置かれているが、これは、ASIにみえる右の構築物よりもさらに新しく建てられたものようである。私たちが訪れたときには、内部の墓石と周囲の欄杆には、美しいチャーターダルがかけられていた。この墓の主人公シェイフ・カマルッディーンについては、バシルッディーンに、シェイフ・カマルッディーン・アッラーマ・ジャーンネシン Shaikh Kamal al-Din Allama' Ja'nshin と記され、チラーグ・デリーのハリーファで七五六AH年に死んだ聖者と紹介されている。⁽²⁴⁾

挿図9 B8-1 墓。シェイフ・カマルッディーンの墓といわれている。南方より撮影。

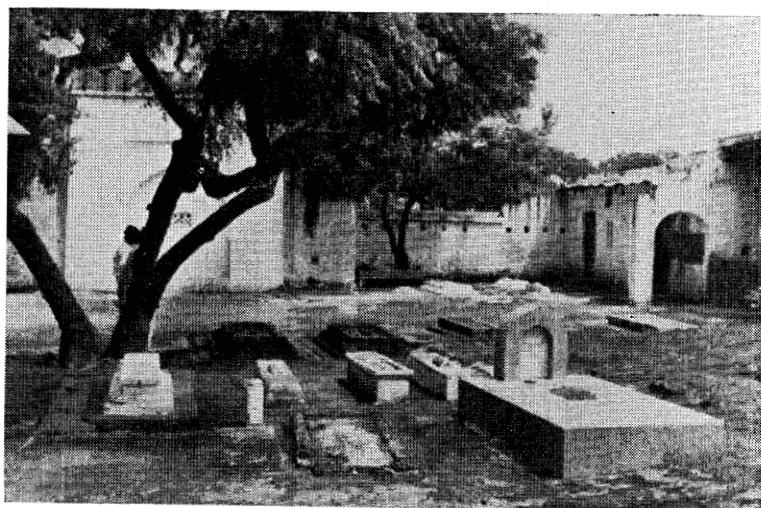


が、これは、いうまでもなく、すでに私も記したとおり（前述一八ページ参照）、ザイヌッディーンと並ぶシェイフ・ナスイールッディーンの甥の一人であろう。ただし、この墓が、真に彼を葬ったものであるかどうかについては確証はない。鈴木斌氏が聞いたところでは、今日、このダルガーにおいて、ウルスの祭礼が行なわれるのは、シェイフ・ナスイールッディーンの場合を別とすれば、このカマールッディーンの墓においてのみであるという。

2 ミルザー・シャブブの墓

この墓は、前述のシェイフ・カマールッディーンの墓の数メートル東の方にあり、赤砂岩の広いチャブートラ（墓壇）の上にあるので、ダルガーの内域の露天の墓石としては目立つ存在である。この墓は、アフマド・ハーンの著書には記されていないが、一九一〇年代のA S Iの「リスト」とバシルッディーン・アフマドには紹介されており、前者は、その造営の年代をムガル末期としている。ミルザー・シャブブ Mirza Shabbu は、ムガル末期の貴族の一

スーフィー聖廟の發展と建造物の造営



挿図10 ダルガー内域の一部（東北隅）。左手の樹の下にあるのが、B8-3 ハージャ・ターヒルの墓。

人である。

3 ハージャ・ターヒルの墓

この墓については、バシルッディーン・アフマドに簡単な紹介があるが、⁽²⁶⁾ダルガー本廟の東南側にある大樹の根もとにある大理石造の立派な墓である(挿図10)。墓石の南面にその名ハージャ・ターヒル Khwajah Tahir と記した刻文は、今日なお明瞭に読み取れる(バシルッディーンは、その刻文をも紹介している)が、この人物については、どのようなものかわからなかった。

4 ムハンマド・サーデーの墓

どの書物にも紹介されていないが、今日、ダルガーのハーディムが訪れるものに好んで示す墓に、ハズラット・カーズィー・ムハンマド・サーデー Hazrat Qazi Muhammad Sadi の墓がある。これは、さきに紹介したシ・エイフ・カマルッディーン⁽²⁷⁾の墓の建物⁽²⁷⁾のすぐ北側に接してあり、近年に設けられた木の枠の墓碑銘がある。それによれば、チラグ・ディリーのハリーフアと記されているが、私には、なおよくわからない。

以上に挙げた墓のほかに、内域には、数多くの古い墓石や明らかに近代のものと思われる墓石があるが、それらについては、ここでは省略せざるをえない。

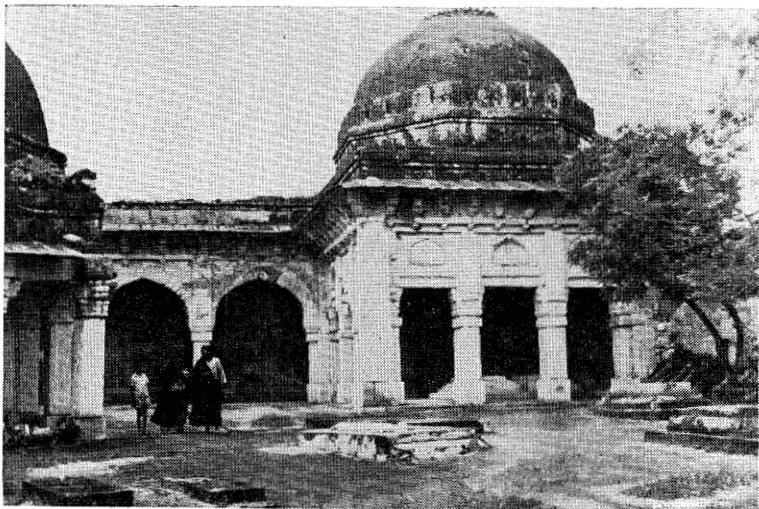
9 宗施設(マハフィル・ハーナ)⁽²⁷⁾〔O 37〕

この建造物は、一八・四メートルと四・八メートルの東西に長い建物で、三間から成り、西の部分は、外辺約七・七メートルの四角平面で、ドームをいただく十二本柱の建造物の南に、直接、つづいている(挿図11)。この興味ある建造物については、アフマド・ハーナをはじめとする十九世紀の諸文献にも、さらにバシルッディーンにさえもま

まったく言及されていない。ただ、インド考古調査局の「リスト」のみが、二つの別個の建造物として記録している。すなわち、東側の長方形の部分の方は、マハフィルハナ *mahafil khana* (すなわち集会堂) またはマドラッサ *madras-sala* (学校) として紹介されており、十二本柱から成る西の部分は、墓として別個の建造物として採録されている。建造の時代区分については、両者ともに、「バターン」期と推定している。

現在、ダルガーのハーディムたちは、東側の長方形の建物を「ムサーフィルハナ」*musafir khana* (宿泊所) と呼んでいる。西の部分の十二本柱の建物の内部には、かなり大きな二基の墓が認められる。私たちは、この二つの部分を、その構造と様式その他の点から推して、おそらくは同じ時期に建てられ、本来は一連のものとして使用されていたもので、後代になって西側の建物のみが墓に転用されたものではないかと考えている。したがって、『デリー』にも *ASI* の「リスト」の如くに二つの別個の建造物とはせずに、全体を

スーフィー聖廟の發展と建造物の造替



挿図11 B9 宗教施設〔O37〕 北方より撮影。左側前方にわずかに見えるのが、B7 墓建築〔T80〕。

一つの宗教施設として採録しておいたものである。

この建造物の造営の時期については、われわれは、サルタナット時代の中・末期に属するものとしたが、早くてトゥグルク朝後期、おそくともローディー朝初期のあたりの建造とみてよいであろう。

10 墓建築〔T28〕

この建造物は、南北にわずかに長い矩形の平面を持つ。ドームはないが、これは、おそらくこの建造物が未完成であることを示すものであろう。ASIは、内部に墓の痕跡はないといっている。現在、この建物は住民によって使用されているために内部に入れず、本来、墓として建てられたものかどうかはよくわからないが、その可能性は大きい。東側に密接して、次項に述べる墓建築〔T27〕が立っている。建造の時期は、サルタナット時代の中・末期のあたりと推定される。

11 墓建築〔T27〕

この建造物は、前項の建造物〔T28〕のすぐ東側に密接して立っている。ドームをいただく四角平面の建物で、現在は住民が使用しているため内部の状態はわからないが、ASIの「リスト」には一基の墓の所在が記録されている。おそらくは、墓建築だったものであろう。

造営の時期は、前項の建造物と同じく、トゥグルク朝後期からサルタナット末期の間に属するものと思われる。

12 墓地

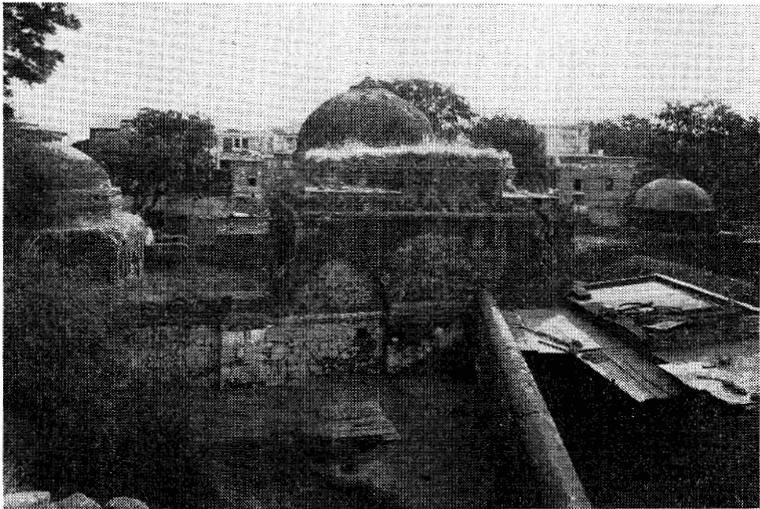
この墓地は、前項の墓建築〔T27〕の西北側に現存するもので、その西側にアーチ型の入口を持っており、なかにはいくつかの墓が存在している。この墓地の囲壁については、ASIの「リスト」は、ムガル期のものとして紹介し

ており、その西側入口に残っていたタイルの残片がクトゥブ・サーヒブのダルガーにみられるアウラングゼーブ時代のタイルと似ている点をとくに指摘している。⁽³⁰⁾しかし、このタイルは、われわれが見た限りでは、残存していなかった。しかし、ASIの「リスト」のいうとおりであれば、ムガル中期の建造の可能性がある。

13 墓建築⁽³¹⁾ 〔T47〕

この建造物は、前項の墓地の東北東側、ダルガー本廟の東南にあたって残存しており、いまは、建造物の下の部分は土中に埋もれてしまっている。ドームをいただく四角平面の建物で、その四面にアーチ型の入口を開いている。現在は住居に用いられているので内部の状況はわからないが、おそらくは、墓建築として建てられたものであろう。

インド考古調査局の「リスト」は、例によってこの建物を「バターン」期のものであるとしているが、われわれの見たところでは、おそらくは、サルタナット時代の末期に造営されたものと考えられる。



挿図12 ダルガー内城東南隅とその外側。B9 宗教施設〔O37〕の屋上から撮影。中央の手前がB10 墓建築〔T28〕、向うがB11 墓建築〔T27〕、向って左方が、B13 墓建築〔T47〕、右方の小さいドームが、C1 墓建築〔T38〕。

C ダルガーの外側、チラীগーデリー部落内とそのすぐ近傍に現存する建造物

1 墓建築〔T 38〕

この建造物は、ダルガーの東南隅からややなれたところに現存する、ドームをいただく四角平面の建造物で、現在は、住居のなかにとり囲まれていて近寄り難いが、おそらくは墓建築と思われる（前ページ挿図12参照）。ASIの「リスト」は、建造の時期を他の墓と同じく「パターン」期と記しているが、おそらくはサルタナット時代末期に属するものと進定してよいであろう。

2 墓建築〔T 26〕

この建造物は、前項の墓建築〔T 38〕と同じく、ASIの「リスト」には紹介されているが、十九世紀以降の他の書物には言及されていない。ドームをいただく四角平面の建物であるが、北側に、整然とした敷石の前庭をもつ門が残っている。ASIの「リスト」は、この墓を「パターン」期のものとし、「ハッジーハーナムの墓」 Tomb of Hajji Khanam として紹介しているが、この婦人がなにものであったかはわからないといっている。そして、西に礼拝壁をもつ囲壁によってとり囲まれていたことをも記しているが、現在、付近には住居が建て込んでいて、さきの北門に続く壁さえ見られない。

この建物と北門とから観察すると、この墓建築の造営の時期は、おそらくはトゥグルク後期からサルタナット時代末期にかけてであったと考えられよう。

なお、この建造物の東方約十メートルのほどのところに、やはりサルタナット末期に属すると思われるバステイオ

ンの一部が残存しており、おそらくは、ガナーティール・マシッドの一部と思われる。しかし、あまりに断片的な遺構なので、本稿では省略しておく。

3 墓建築〔T 24〕

この建造物は、ドームをいただく外辺約六メートルの四角平面のもので、四方に入口を開いているらしいが、現在、住居に使われていてよくわからない。構造と様式とからみて、建造の時代は、トゥグルク朝後期からサルタナット時代の末期と推定される。おそらくは、墓として建てられたものであろう。

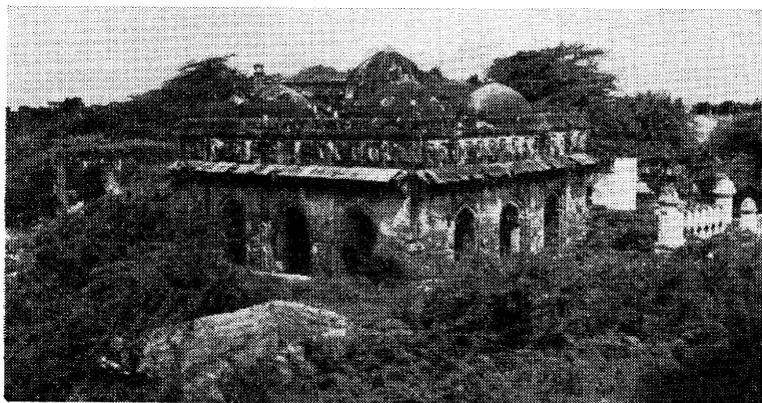
4 墓建築〔T 23〕

この建造物は、前項の墓建築〔T 24〕の東北方約十メートルほどのところにあり、ドームをいただく、外辺約六・五メートルの四角のプランを持っている。現在、住居にとり囲まれているので詳細はわからないが、その建造の時期は、前項の墓建築〔T 24〕と同じく、トゥグルク朝後期からサルタナット時代末期のころと推定される。

なお、この建造物は、バシール・ディーン・アフマドの著書に前項の墓建築〔T 24〕とともに、「二つの不明のグンバッド」として紹介されているが、⁽³⁶⁾とくにここに記すべき内容はない。

5 スルターン・ハロール・ローディーの墓として知られている墓建築〔T 133〕

この建造物は、チラーグ・レリー部落の西端、部落を囲む城壁の内側の近く、ダルガールの西壁のすぐ外側に現存している。外辺約十三メートルの四角平面の建物で、ミヒラーブが設けられている西壁を除く三面にそれぞれ三つの入口を開き、内部は九つの間からなっており、中央と四隅の間には、それぞれドームをのせている特異な建造物である。中央の間には、それぞれ基台の上に立つ二つの墓石があり、また、西の間には漆喰の墓の痕跡が認められる。



挿図13 C5 墓建築〔T133〕 バハロール＝ローディーの墓として知られる。
 東南方より撮影。手前右側にわずかに見えるのは、B4 墓地〔G33〕の
 礼拝壁の上部。左側には、C9 門が見える。

この建造物については、十九世紀のアフマドハーンをはじめ、その後の旅行記や記録類の多くに紹介されており、いずれも、デリーサルタナット時代末期の最後の王朝たるローディー朝の初代のスルターンたるバハロールシャー（在位一四五―一八九）の墓と紹介されている。しかし、この建造物がそのスルターンの墓であることを直接に証拠立てる刻文その他の資料の類は、この遺跡の内外にまったく見あたらない。アフマドハーンは、その初稿本では触れていないが、改稿本においては、スルターンバハロールシャーが死んだのち、「その遺体を、この場所のローシャネチラーゲデリーのダルガーのそばに (dargah ke pas) 運んで埋葬した。そして、彼の子のスルターンサイカンダルがこの墓を造った」と記している。⁽³⁸⁾ このアフマドハーンの記述は、のちに、バシルッディーン⁽³⁹⁾もAS Iの「リスト」にも受けつがれている。これらの記述のうち、シェイフナサイルッディーンのダルガーの近くに葬られたということは、アフマドハーンがなによって記したものが明らかでない。私自身、いくつかの史書に当たってみたが、そうした記述を見出すことはできなかった。この点は今後の研究にまかした

われわれのみるところでは、この建造物は、明らかにデリー・サルタナット時代のもので、その構造と様式からみて、おそらくはその末期すなわちローディー朝のあたりに属するものと推定されるのである。したがって、さきに述べたように、積極的な資料はないにしても、伝承や近代の諸文献が述べるとおりに、この興味ある建造物が、ローディー朝の初代のスルターンたるバハロール・シャーの墓である可能性もあり得よう。なお、このことについては、本稿六三—六五ページを参照されたい。

6 墓地

前項の墓建築〔T 133〕の東南東約八メートルほどのところがあり、赤砂岩の基壇の上に造られている墓地で、ASIの「リスト」には、ジャーリー・スクリーンの囲壁を持ち、二基の漆喰の墓があったと記されている。⁽⁴⁾同書はこの墓地の年代を「パターソン」と記しているが、われわれの見たところでは、ムガル後期のものと思われぬ。

7 墓地⁽⁴⁾〔G 9〕

前項の墓地の南西に当ってすぐその近くにあり、バハロール・ローディーの墓とされる建造物〔T 133〕のすぐ南側にある。ASIの「リスト」も含めて、この墓地については、これまで、どの文献も言及していない。

低い基壇の上であり、三つのミヒラブと両端に小塔をもつ礼拝壁を備えており、その構造と様式とは、サルタナット時代中期、おそらくはトゥグルク朝後期以降の特徴を備えているという点で、かなり重要な遺跡とも考えられる。この墓地内に現存する一つの大きな墓石が、すぐ前のバハロール・ローディーのものと考えられてきた墓建築の内部にある二基の特徴ある墓石とほぼ同じ型をしている点も、きわめて興味を持たれるところである。

8 モスク⁽⁴²⁾ (M 60)

チラーグ・デリーの部落の西北隅に近く、ダルガーの西北西、バハロール・ローディーの墓と伝えられる建造物「T 133」のすぐ西北にある。

三つの部屋からなる長方形の大規模な建造物で、現在もドームはないが、ASIの「リスト」は、未完成に終わったものと推定している。現在、住居に用いられているので、内部には入り得なかった。ASIの「リスト」は、このモスクが北側に入口をもつ遺壁に囲まれていたと述べている。

同じく一九一〇年代のバシール・ディーン・アフマドは、根拠は明らかにしていないが、このモスクを、「アラウウ・ディーン・ハルジーが造り、未完成のままとなったといわれている」と紹介し、ハルジー朝の建造物のごとくに紹介している。⁽⁴³⁾ ASIの「リスト」の方は、「バターン」の時代としているが、われわれの見るところでは、ハルジー朝の建造物とは考えられず、サルタナット時代末期のものとするのがもっとも妥当と考えられる。長さ約三十メートル、奥行き約十三メートルの、三間からなる、かなり大規模なモスクであり、本稿の視点からみれば、ダルガーのすぐ西北方に建てられている点がきわめて興味がある。

9 門

この門は、きわめて興味ある遺構である。すでに紹介したバハロール・ローディーの墓と伝えられる建造物「T 133」の西北方数メートルのところにある、その墓建築よりやや低い地面に立っており、この遺跡に並行して、次項に述べる部落を囲む城壁の西の部分が走っているのである(挿図2・13参照)。この門が私の関心と呼ぶのは、それが明らかに、囲壁の一部を成していたと思われるダルワーザすなわち入口の門の形式を備えているからであり、さらに、この

遺構が、おそらくはサルタナット時代末期に造営されたものと推定し得るからである。

このダルワーザが、はたして如何なる建造物の入口の門として建てられたかは不明であるが、可能性としては二つあるように思う。その一つは、バハロールローディーのもとと伝えられてきた墓〔T 133〕の囲壁の西側の門であったとする推定であり、他は、シェイフナスィールッディーンのダルガーのもとと囲壁の西側のダルワーザであったとする考え方である。前者の可能性も多いが、後者の可能性もまったく否定することはできないであろう。いずれにせよ、囲壁の一部と思われるこの門が、現在の部落の外壁を成す大城壁にほぼ並行して、そのすぐ内側に残っている事実はきわめて興味があるところで、これについては、またのちに触れたいと思う。

10 墓建築〔T 113〕

この建造物は、チラীগーデリーの部落を囲む城壁の東門のすぐ外側にある。ドームをいただく十二本柱から成る建物で、A S I の「リスト」は、内部に一基の墓石があったと記し、「バーラカンバー」Barah Kambā (十二本柱の意)と呼ばれていたという。構造・様式からみて、サルタナット末期の建造と考えられる。

D チラীগーデリー部落の城壁

この大城壁は、現在、チラীগーデリーの部落をとり囲む囲壁の役割を果しており、鈴木氏と私とが一九七三年九月に見たときには、この囲壁の一部、とくに北側と東側の住居がたてこんでいる部分は、随所で崩されかけていた。現在は、チラীগーデリーロードに面した北門が部落の主要入口として用いられているが、他の三つの側にもそれぞれ門が造られている。また、四隅には、それぞれドームをいただくチャハトリのある円型のバステイオンが備わり、

きわめて堂々たる大城壁である。

この囲壁に関しては、十九世紀中葉のサイイド・アフマド・ハーン以来、多くの書物が、紹介あるいは言及しているところである。サイイド・アフマドによれば、この城壁は、ムガル皇帝ムハンマド・シャー（在位一七一九—一四八年）が造営させたものとしているが、⁽⁴⁵⁾ ASIの「リスト」は、ムハンマド・シャーが、「聖者チラーゲ・デリー」に対するその敬意をあらわすため」に建造させたと述べている。⁽⁴⁶⁾ 彼によれば、そのために四七万五千ルピーの巨額が費されたということをも記しているが、それは多額に過ぎ、誤まりであろうともつけ加えている。ムハンマド・シャーの城壁建立については、私自身、同時代の文献を調べていないので断言はできないが、十九世紀中葉のサイイド・アフマド・ハーンの記述は、おそらくは信じてよいものと思われる。ただ、サイイド・アフマドのいうとおりに、その事業が、シェイフ・ナスールディーンのダルガーへのこの皇帝の崇敬の念から出たものかどうかは、なお研究の余地がある（後述六七—六八ページ参照）。

- 1 この「遺跡総目録」で用いた建造物の分類・配列・時代区分・記号などについては、『デリー』第一巻、「遺跡総目録」、四七—五〇ページを参照されたい。念のためにここに記すと、「M」はモスク、「G」は墓地、「T」は墓建築、「W」は水利施設。「O」はその他の建造物で、門・城壁、あるいはハーンカー・マドラッサなどの宗教施設は、この「O」に含まれる。
- 2 『デリー』第一巻、九〇ページの叙述 および挿図38を参照。Archaeological Survey of India, *Delhi Province, List of Muhammadan and Hindu Monuments* (即ち ASI's List と略称する), vol. III, No. 221.
- 3 S. Ahmad Khan, *Ahār al-Sanādīd*, 1st ed. (pub. in 1896), Pt. I, op. to p. 18.
- 4 *Ibid.*, p. 18.
- 5 Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, p. 146. ASI's List, vol. III, p. 131. Bashir

al-Din Ahmad, *Waqi'at-i Dār al-Hukūmat-i Dihli*, vol. II, p. 93.

- 6 ASI's *List*, vol. III, p. 131.
- 7 『ネリー』第一卷『一〇九ページの叙述』をよむ挿圖を参照。ASI's *List*, vol. III, No. 220, pp. 130~131.
- 8 Ahmad Khan, 1st ed., Pt. I, p. 19. ASI's *List*, vol. III, p. 130. Bashir al-Din Ahmad, vol. III, p. 93.
- 9 Ahmad Khan, 1st ed., Pt. I, p. 19.
- 10 ASI's *List*, vol. III, No. 222, p. 132.
- 11 Ahmad Khan, 1st ed., Pt. I, p. 20. ASI's *List*, vol. III, p. 133.
- 12 ASI's *List*, vol. III, No. 222, pp. 132~133.
- 13 『ネリー』第一卷『六七ページの叙述』をよむ挿圖版六三〇を参照。ASI's *List*, vol. III, No. 224, p. 133.
- 14 カナーチターミンシヤ汗 ganāthi masjid は「カナーチターミンシヤ汗」ganāthi masjid 及び「カナーチ」をよむ冊壁の意味をよむ。西側の社拝壁だけのものをよむは「カナーチターミンシヤ汗」の西端の袖壁 (リターンウォール return-wall) のものをよむ。四周を冊壁で囲むものなどがよむ (『ネリー』第一卷『四〇ページの参照』)。この墓壇〔G3〕は「袖壁を有する墓壇」。
- 15 『ネリー』第一卷『八八ページの叙述』をよむ挿圖版一一三〇を参照。ASI's *List*, vol. III, No. 225, pp. 133~134.
- 16 Ahmad Khan, 1st ed., Pt. I, p. 18. Bashir al-Din Ahmad, vol. III, p. 93.
- 17 この聖墓の一族をよむの挿圖をよむは『Khaliq Ahmad Nizami, *The Life and Times of Shaikh Farid-ud-Din Ganji Shaker*, Aligarh, 1955 を参照。
- 18 『ネリー』第一卷『八四ページの叙述』をよむ挿圖版一〇六〇を参照。
- 19 Ahmad Khan, 1st ed., Pt. I, p. 19.
- 20 Bashir al-Din Ahmad, vol. III, p. 93. ASI's *List*, vol. III, No. 229, p. 135.

スノーモー聖廟の發展と建造物の造營

- 21 『テリー』第一卷 八二ページの叙述 および図版一〇三を参照。ASI's List, vol. III, No. 228, p. 135.
- 22 Ahmad Khan, 1st ed., Pt. I, p. 18.
- 23 ASI's List, vol. III, No. 230, pp. 135~136.
- 24 Bashir al-Din Ahmad, vol. III, pp. 93~94.
- 25 ASI's List, vol. III, No. 231, p. 136. Bashir al-Din Ahmad, vol. III, p. 94.
- 26 Bashir al-Din Ahmad, vol. III, p. 94.
- 27 『テリー』第二卷 図版一六〇の、および一〇九ページの叙述と挿図71の西側部分内部の写真を参照された。ASI's List, vol. III, No. 226, No. 227, pp. 134~135.
- 28 『テリー』第一卷 七五ページの叙述 および図版八二を参照。ASI's List, vol. III, No. 235, p. 137.
- 29 『テリー』第一卷 七五ページの叙述 および図版八二を参照。ASI's List, vol. III, No. 234, p. 137.
- 30 ASI's List, vol. III, No. 202, p. 136.
- 31 『テリー』第一卷 七五ページの叙述 および図版八七を参照。ASI's List, vol. III, No. 233, pp. 136~137.
- 32 『テリー』第一卷 七六ページの叙述 および図版八五を参照。ASI's List, vol. III, No. 236, pp. 137~138.
- 33 『テリー』第二卷 図版八二の、および七五ページの叙述と挿図31の北側の門の写真を参照。ASI's List, vol. III, No. 237, p. 138.
- 34 『テリー』第一卷 七五ページの叙述 および図版八二を参照。ASI's List, vol. III, No. 241, p. 140.
- 35 『テリー』第一卷 七四ページの叙述 および図版八二を参照。ASI's List, vol. III, No. 242, p. 140.
- 36 Bashir al-Din Ahmad, vol. III, pp. 98~99.
- 37 『テリー』第一卷 八九一九〇ページの叙述 および図版一二〇を参照。ASI's List, vol. III, No. 238, pp. 138~139.

- 38 Ahmad Khan, Rev. ed., p. 216.
- 39 Bashir al-Din Ahmad, vol. III, p. 100.
- 40 AST's List, vol. III, No. 239, p. 139.
- 41 『テリー』第一卷 六四一六五ページの叙述、および図版五八dを参照。
- 42 『テリー』第一卷 六一一六三ページの叙述と挿図18を参照。AST's List, vol. III, No. 240, pp. 139~140.
- 43 Bashir al-Din Ahmad, vol. III, p. 99. ただし、この建物の紹介の見出しの方では「ジャラールッディーン＝ハルジーの未完成のモスク」(Jalal al-Din Khalji ki na-tamam Masjid, 1290~96 A. H.)と記す。ハルジーの叙述の混乱を示している。いずれにせよ、ハルジー朝時代の未完成のモスクと考えたことはたしかである。
- 44 『テリー』第一卷 八七ページの叙述、および図版一四aを参照。AST's List, vol. III, No. 244, p. 141.
- 45 Ahmad Khan, 1st ed., Pt. 1, p. 20.
- 46 AST's List, vol. III, p. 130.

四 ダルガーの変遷と建造物の造営

前章において、私は、シェイフ＝ナスィールッディーンのダルガーに現存するトゥグルク朝後期から現代に至る間に造営された諸種の建造物について紹介し、若干の解説を加えてきた。本章では、これらの建造物の種類とその造営年代、およびその造営の主体などについての私自身の推論に基づいて、トゥグルク朝後期以降今日に至るシェイフ＝ナスィールッディーンのダルガーの変遷、とくに権力との関係について、可能な範囲で推察を加えてみたいと思う。さて、すでに紹介したダルガー内域およびチラーグ＝デリー部落内とその近傍に現存する諸種の建造物を、推定し

得る造営年代別に分けてみると、ほぼ五八一六〇ページの表のように整理できる。⁽¹⁾

なお、念のためにくり返して記しておく、表のなかで用いた記号「A」は、ダルガーの本廟すなわちシェイフの墓を示すものであり、「B」は、現在のダルガー内域あるいはその囲壁に沿って現存している建造物、「C」は、ダルガーの内域の外、チラーグッデリー部落内部およびその外側近傍の地に現存する建造物、「D」は、チラーグッデリー部落を囲んでいる城壁を示すものである。

(1) トゥグルク朝後期に造営されたと推定される建造物

A 1 墓建築〔T 135〕 シェイフナスィールッディーンの墓 現存の回廊部は近代の造営、内部の十二本柱の建物が当代の造営。

B 1 ダルガーの表門〔O 38〕 東側にスルターン・フィーローズ・シャー治世の七七五AH年すなわち一三七三—七四年を建立の年と記す刻文が残存している。

B 5 墓建築〔T 124〕 バーバー・ファリドの孫娘の墓と伝えられる。

B 6 墓建築〔T 93〕 シェイフ・ザイヌッディーンの墓と伝えられる。

B 7 墓建築〔T 80〕

C 7 墓地〔G 9〕

(2) トゥグルク朝後期乃至はサルタナット時代末期に造営されたと推定される建造物

B 9 宗教施設〔O 37〕 マハフィール・ハーナすなわち集会堂と推定される。ただし、西の部分は、後代に墓に転

用されたものらしい。

B 10 墓建築〔T 28〕

B 11 墓建築〔T 27〕

C 2 墓建築〔T 26〕

C 3 墓建築〔T 24〕

C 4 墓建築〔T 23〕

(3) サルタナット時代末期に造営されたと推定される建造物

B 4 墓地〔G 33〕

B 13 墓建築〔T 47〕

C 1 墓建築〔T 38〕

C 5 墓建築〔T 133〕 スルターンハバハロールシャーローディーの墓と伝えられる。

C 8 モスク〔M 60〕

C 9 門 ダルガーの西門、あるいは墓建築〔T 133〕の西門か？

C 10 墓建築〔T 113〕

(4) ムガル中期以降に造営されたと推定される建造物

B 2 モスク ファルフスィヤル皇帝治世の造営と伝えられる。

B 3 宗教施設 マジュリスハーナで、ムガル末期の造営。

スーフィー聖廟の發展と建造物の造営

B 12 墓地 ムガル中期アウラングゼーブ時代の可能性もある。

C 6 墓地 ムガル中期あるいは末期。

D 1 城壁 チラーグ・デリー部落の外城壁、四方に門あり。ムハンマド・シャー治世、すなわち十八世紀前半の建設といわれる。

(付) ダルガー内域に現存する墓石の一部

B 8—1 シェイフ・カマルディーンの墓と伝えられる。ただし、上の建造物は近代の造営。

B 8—2 ミルザー・シャブーの墓と伝えられる。

B 8—3 ハージャ・ターヒルの墓と伝えられる。

B 8—4 カーズィー・ムハンマド・サーディーの墓と伝えられる。

さて右の表のように、ダルガー内外、チラーグ・デリー部落内外に現存するさまざまな建造物を、ほぼ推定し得る造営の時代順に並べてみると、はたしてどのようなことが指摘できるであろうか。つぎに、それについて、若干の私見を記してみよう。

(1) トウグルク朝後期の状況

シェイフ・ナスィールディーンのダルガーの内外に現存する建造物のなかで、トウグルク朝後期におけるその建設年次がほぼ判明するのは、B 1のダルガーの表門〔O 38〕のみである。すでに紹介した同時代のものと思われる刻文の存在によって、この表門が、スルターン・フィローズ・シャーの治世の七七五AH年すなわち一三七三—七四年

に建立されたことは、まず、誤りないとみてよいであろう。

この建造物は、構造上からみて明らかのように、ダルワーザすなわち門として建てられたものである。この事實は、このダルワーザが造営された時期には、一定の区域を持つところのダルガーの内域がすでに存在していたということの意味する。刻文に記された七七五AH年すなわち一三七三―七四年は、シェイフ・ナスィールッディーンの死後わずか十七、八年のちのことである。つまり、このシェイフの死後二十年を経ないうちに、すでにこのような堂々たるダルワーザを構えるにふさわしいほどのダルガーが成立していたと推測することも可能なのである。その場合、シェイフ・ナスィールッディーンの墓廟が、このダルワーザの建てられるまえにすでに建立されていたと推定しても決しておかしくはないであろう。それが、現存する十二本柱からなるドームをいただく建造物〔T 135〕（ただし、現在見られる近代の回廊の部分を除く）そのものであったかどうかはわからない。その当初は、あるいは墓石のみしかなかったかもしれない。しかし、この十二本柱の本来の墓建築を他のデリーに残存するトゥグルク朝後期の同型の建造物と比較してみると、その時代区分上の特徴からして、問題のこの建物〔T 135〕が、表門〔O 38〕の造営と同時に至はそのすぐ前後の時期に建立されたと推測しても、少しも不自然とはいえないのである。

いづれにせよ、スルターン・ヒーローズ・シャー・トゥグルクの治世の一三七〇年代に、すなわち、シェイフ・ナスィールッディーンの死後わずか二十年を経ないうちに、このチシュティ派の聖者のダルガーが然るべき規模を備えて造営されていたことは、これらのことがらから十分に推定し得るところといえよう。

すでにさきの表に整理したところからわかるように（五八一―五九ページ参照）、トゥグルク後期に建てられたと推定される建造物には、B 5〔T 124〕・B 6〔T 93〕・B 7〔T 80〕の三つの墓建築と、C 7の墓地〔G 9〕などがあり、さ

らに、あるいはサルタナット末期にかかるかもしれないが、トゥグルク朝後期に造営された可能性もある建造物としては、B 10〔T 28〕・B 11〔T 27〕・C 2〔T 26〕・C 3〔T 24〕・C 4〔T 23〕等の墓建築、およびB 9のマハフィル・ハーナと推定される宗教施設〔O 37〕などがある。これを要するに、トゥグルク朝後期、すなわちスルターン・フィローズ・シヤールの治世（二三五一—八八年）以後に、いくつかの墓建築あるいは集会堂などの宗教施設が、シェイフ・ナスィールッディーン・マフムードの本廟を中心として、そのダルガールの内域あるいは周辺の地につきつぎに建てられたということが推察できるのである。

すでに触れたように、現在のダルガー内域そのものが、そのまま、トゥグルク朝時代のダルガールの境域と同じであったとは限らない。私の推察では、トゥグルク朝後期乃至はサルタナット末期のものと思われる建造物の散在する地点からみて、本来のダルガールの境域は、現存のダルガールの内域、すなわち「B」地域よりも若干広かった可能性もあるかもしれない。いづれにせよ、トゥグルク朝の後期に、ダルガールの内域あるいはその周辺の地に、この聖者にゆかりのある宗教者や当時の支配層に属するものたちを葬った墓が、ダルガールの存続・維持に必要な宗教施設などとともに、十指を越えるほどの数をもって建てられていたということは、このダルガーが、トゥグルク朝後期に、人びとの崇敬をあつめ、当時の支配層によっても相当に重要視されていたのではないかということ推測させるものである。

(2) サルタナット時代末期の状況

サルタナット時代の末期すなわちサイド・ローディー両王朝の治世（一四一四—一五二六年）に造営されたと推定される建造物としては、さきの表に記したように（五九ページ参照）、B 13〔T 47〕・C 1〔T 38〕・C 5〔T 133〕・C 10〔T 113〕の墓建築のほかにも、かなりの規模をもつC 8のモスク〔M 60〕などがあり、その他、B 4の墓地G〔33〕、

さらに、問題のC9のダルワーザの遺跡等が挙げられるのである。

このように、スルターン・フィーローズ・シヤール以降のトゥグルク朝後期における墓建築やその他の建造物の造営につづいて、サルタナット末期すなわち十五世紀から十六世紀のはじめにかけての時期においても、このダルガーの内域および周辺の地域には、いくつかの墓建築をはじめ、かなりの規模を持つモスクなどが建てられていたことがわかる。このことから推すと、サルタナット時代末期においても、このダルガーの宗教的権威はひろく認められており、そのダルガーの内外の地に、支配層による墓や宗教施設の建設あるいは寄進が、なお、前代にひきつづいて行われていたことが、ほぼ、推測され得るのである。

このなかで、とくに注意すべきは、C5の墓建築〔T13〕、すなわちスルターン・バハロール・ローディー（二四八九年死）の墓と伝えられる遺跡の存在である。これについては、すでに前章においても説明を加えておいたが、もしこの建造物がローディー朝初代のスルターンの墓とするならば、それは、サルタナット最後の王朝の支配層が、その王朝創始者たるスルターンの墓を、シェイフ・ナスィール・ディーン・ダルガーのすぐそばの地に選んだことを示すものであり、スーフィー聖者の宗教権威にあやかうとしたサルタナット末期の支配層の意識を知る一つの手がかりとしてとくに興味をひくところである。仮りに、この建造物がスルターン・バハロールの墓ではないとしても、その特異な構造や様式からみて、それが、当時、かなりの権力的地位にあったものの墓であることは容易に想像できるところである。さらにこの墓域のすぐ北方に現存しているC8の大規模なモスク〔M60〕の存在も、その建設の背後に相当の権力乃至は経済力の存在を想像させるものがあるのである。

これを要するに、サルタナット末期においても、前代にひきつづいて、シェイフ・ナスィール・ディーン・ダルガ

一の内域やその近傍の地域には、当時の支配層や富者によって、墓やその他の宗教建造物が造られたと推定されるのである。いいかえれば、スルターンニフィーローズトウグルク治世以来のこのダルガーの権威は、そのまま保持されつづけていたとみてよさそうである。

(3) ムガル初期・中期の状況

一五二六年、ムハンマドニバーブルは、ローディー朝の残存勢力を破って、デリーの地にのちのムガル帝国の基礎をつくり出すことに成功した。このニバーブルが、みずからの行動を記録に残していることは周知のところであるが、同二六年四月下旬の部分には、デリーにおいて、往古の著名なスルターンや聖者の墓廟を訪れたという記述が見出されるのである。すなわち、四月二十四日に、ニバーブルは、みずから「シェイフニザームディーンオーリヤーの墓」を訪ねており、さらに、その翌二十五日には、奴隸王朝のスルターンニバルバンやハルジー朝のスルターンニアラウッディーンらの墓とともに、「ハーシャクトゥブディーン⁽³⁾の墓」をも訪れたことを記している。しかも、その同じ日の記述によると、彼は、「スルターンニバハロールおよびスルターンニシカンダルの墓と庭園」をも訪れていることがわかるのである。この記述は、これまでしばしば触れてきたスルターンニバハロールニローディーの墓とされるC5の墓建築「T133」の比定についても、問題を投げかける史料としても興味あるものであるが、同時に、シェイフニザームディーン⁽⁴⁾のダルガーについての史料としても、いくつかの推論を可能にするものである。

まず注意すべき点は、ニバーブルが、ニザームディーンニオーリヤーとクトブディーンニバフティヤールニキーの二人のダルガーを訪ねたと記しながら、シェイフニザームディーン⁽⁴⁾の墓を訪ねたと書残してはいないことである。さらにまた、ニバーブルがシカンダルニローディーの墓とともに訪ねたというスルターンニバハロール

ローディーの墓が、もし、本稿でもしばしば紹介したC5の墓建築〔T133〕であるとするならば、バールが、そこから三〇メートルと離れていないシェイフ・ナスイルツディーンの墓を訪ねなかったということは、いささかおかしなことである。だから、この点からして、スルターン・バハロールのものとする墓建築〔T133〕の真偽について疑ってみることもできるわけだが、あくまで、このスルターンの墓をC5の墓建築〔T133〕とする見解をとれば、結論はおのずから異なってくる。その場合には、皇帝バールは、シェイフ・ナスイルツディーンにそれほどの関心を持たなかったために、その墓に立ち寄らなかったか、あるいは、その地を訪れても彼の記録には残さなかったかのいずれかであろう。いいかえれば、少なくとも、バールは、この聖者を、クトゥブ・サーヒブやシェイフ・ニザームツディーンほどには重視していなかったという推測も成立つのである。

以上に記したことは、かりに、バハロール・ローディーの墓が問題の建造物〔T133〕でなかったとしても、ある程度、あてはまることであろう。すなわち、もしバールが、シェイフ・ナスイルツディーンの名声を聞いていたり、あるいは、彼自身、この聖者に崇敬の念を覚えていたとするならば、必ずや、クトゥブ・サーヒブやニザームツディーン・オリーヤのダルガーに加えて、この聖者の墓をも訪れ、また、彼の記録にも残していたはずである。彼の記録がそれに触れていないということは、バールがデリーに進攻してきた時代には、あるいは、少なくとも、デリーに来て間もないバール自身にとっては、シェイフ・ナスイルツディーンの墓については、それを知らなかったか、または、さきの二人のチシュティ派の聖者のダルガーほどには強い関心を寄せる対象ではなかったという推測も可能なのである。

このことは、残存する建造物に関する限り、バールにつづくムガル初期・中期の状況をも示唆するものといえる

のである。すなわち、このダルガーの内域あるいはその周辺の地域には、ムガル初期乃至は中期に建てられたと思われる建造物はほとんど見当たらないのである。すでに述べたように、インド考古調査局の「リスト」は、ダルガー内域の東南隅に残っているB 12の墓地を、ムガル第六代皇帝アウラングゼーブの治世（一六五八—一七〇七年）の間に建てられたものと推定しており、その可能性もあるし、他のC 6の墓地も、ムガル中期にまでさかのぼるものと考えられるかもしれない。しかし、それらの推測は確定的ではないし、この二つの墓地を除くと、このダルガー内外のさまざまな遺跡のなかで、ムガル初期から中期に至る間に造営されたと思われる墓や宗教施設は、他にほとんど存在していないのである。

こうした状況から考えてみると、ムガル初期・中期にあつては、シェイフ・ナスィールッディーンのダルガーは、その権威と影響力とにおいて、少なくともフィーローズ・シャー・トウグルクの治世からサルタナット末期にかけての時代に比べて若干の変化があり、あるいは弱まったのではないかと考えることも可能なのである。パーブルの記録におけるこの聖者のダルガーに関する記載の欠如は、そのまま、その後の約二〇〇年の状況を予見するものとみることもできるのである。

4 ムガル後期における状況

ダルガーの内域には、さきに紹介したB 12の墓地やC 6の墓地などを別とすれば、ムガル中期の建立の可能性を持つ建造物はほとんど目立たない。しかし、十八世紀の前半になると、建造物の造営という点からみて、このダルガーの内外には著しい変化が認められる。

すでに紹介したように、ダルガーの内域には、十八世紀前半からムガル末期にかけて建造されたと推定される建造

物には、ファルフスィヤル皇帝の治世の造営と伝えられるB2のモスク、および、より後代に属すると思われるB3のマジュリスィハーナが現存している。しかし、この時期の最も重要な建造物は、チラーグィデリー部落全体を囲む城壁である。堂々たるダルワーザおよびバステイオンを備えたこの城壁は、すでに記したように、十八世紀前半のムハンマドィシャーの治世に建造されたものである。

これらの建造物の存在は、十八世紀前半になって、このダルガーが、この時期に、ムガル皇帝あるいは支配層の注意を惹いたことを示すものと考へ得る。ファルフスィヤルの治世（一七一三—一八九）には、クトゥブィサーヒブのダルガーの内外にもいくつかの建造物が建てられているし、ムハンマドィシャーの治世にも、同様なことが指摘しうる。十八世紀前半、ムガル皇帝の権威がやや回復のきざしを示したときに、デリーのダルガーがムガル支配層の注意を惹いたことについては、さまざまな歴史的要因が考へられるが、これについては、他日を期したい。

とくに注目すべきは、ムハンマドィシャーによる城壁の構築である。デリーのムスリム支配層が宗教権威の存続する場所に大規模な城壁を造営した例は、このムハンマドィシャー治世におけるチラーグィデリーの場合を除くと、あとは、トゥグルク朝のフィローズィシャーの治世における、今日のニューデリー北西に残るいわゆる「カダムィンヤリーフ」Qadam Sharifの聖域を囲む大城壁⁽⁵⁾（O8）を挙げ得るのみである。

このカダムィンヤリーフの場合とシェイフィーナスィールディーンのダルガーの場合とは、そもそも宗教権威の内容からして多くの相違点を持っているが、それにしても、著名なスィフイーィダルガーの所在地の周辺の地を、大城壁をもって囲んだその意図は奈辺にであったのであろうか。デリーにおいては、クトゥブィサーヒブやシェイフィーナスィールディーンィオーリヤールの場合でさえ、そうしたことは見られなかった。すでに触れたように、サイイドィアフ

マドゥ・ハーンは、この城壁造営の理由として、ムハンマド・シャーが、「聖者チラーゲ・デリーに対する彼の敬意をあらわすため」に建造させたと述べており、そのために、伝承には多少の誇張があるにもせよ、巨額の資金が投じられたことを紹介している（本稿五四ページ参照）。しかし、このムガル皇帝が、たとえこの聖者あるいはダルガーに深い崇敬の念を抱いていたとしても、その敬虔なる宗教心がただちにこうした大城壁の造営という事業と結びつくかどうか、さらに考察を加える余地があるであろう。これについて私見を述べるには、なお資料不足の点もあるので、いまはさしひかえるが、この城壁造営の背景は、他になんらかの非宗教的な根拠があったと、私は考えている。

しかし、ともかくも、この城壁の造営とダルガー内域における二、三の宗教施設の建立の事実は、ムガル後期、とくに十八世紀前半に、このダルガーの宗教権威が、ふたたび高まったことを示すものであることは指摘できよう。さらに、こうした建造物の造営、とくに大規模な城壁・城門の建設が、それ以後の時期におけるこのダルガーの権威の存続に影響したことも、容易に想像できるところである。

5 二十世紀から今日に至る状況

一九一〇年代に、デリーとその周辺の遺跡をみずからの足と目とによって訪ね回ったバシル・デューン・アフマドの著書『首都デリーのことども』を読んでいると、往古のムスリム建造物が、なかば崩壊しつつ残っている荒涼たる状況が読むものに伝わってくる。とくに、墓やモスクが、ヒンドゥーあるいはジャート Jats の所有に帰し、その住居として用いられていることに對するムスリムとしての無念さが、感慨をこめて記されているのである。

もつとも、そのバシル・デューンも、このダルガーの内部の建物については、かなり「よい状態にあり、新しく修復も行なわれた」と述べており、この時期にも、このダルガーの状況が、少なくともその内域に関する限りは、決

して悪くはなかったことを伝えてはいる。しかし、同時に、部落をとり囲む城壁については、「いまは、この城壁のところが崩れかけてはいるが、それでも崩れ落ちるまでには、なお、何百年もかかることであろう」と述べ、その一部が、そのころ、すでに崩壊しはじめていたことを紹介している。⁽⁶⁾さらに、ダルガー近傍のC8のモスク〔M60〕については、「現在ではすっかり崩れているので、完成したとも中途でやめたとも、なんとも推測できる」「内側も外側も漆喰はすっかりはがれて、はだかの石が露出している。マシジッドの内にも、外にも、固い床は残っていない。マシジッドはたいへんに荒れている」と述べたあげく、「このマシジッドがこんな状態になっているのも、また、神の御威光である。」と嘆するのである。⁽⁷⁾いささか、バシールッディーンの記述にこだわりすぎたきらいがあるが、右の引用からも、二十世紀十年代におけるこのダルガーとその周辺地域の状況の一端は窺い知ることができよう。

一九四七年八月のインド・パキスタンの分離・独立は、周知のように、インドにおけるムスリム社会に決定的な影響を与えた。この動乱期に際して、デリー諸地域にあったムスリムの宗教施設をはじめ諸種の建造物は、一部のファナティックなヒンドゥーの攻撃目標となり、一部の地域においては、流血の惨事もみられた。

ムスリム聖者のダルガーも、こうした逼迫した当時の状況の影響をよく受けている。ニューデリーとその周辺のムスリム諸遺跡を訪れはじめた一九五四年以降、私は、各地の宗教施設において、こうしたいわゆるコミュニナな騒擾事件を耳にし、大小のダルガーにおいても、そのピールザダやハーディムたちから、当時のさまざまないまわしい体験について聞かされた。たとえば、一九一〇年代のインド考古調査局の調査の際には、建造物になお存在していた諸種の碑文・刻文のなかで、私の調べたところでも、この動乱期に際して、破壊され、あるいは持ち去られたものがかなりの数にのぼることも、こうした状況をいまに伝える証拠の一端といえよう。

シェイフ・ナスイールッディーンのダルガーも、この動乱の嵐の外にとどまることはできなかった。このときのダルガー本廟内部の刻文の喪失についてはすでに触れたが（三五ページ参照）、この独立前後から二十世紀後半へかけての時期は、ダルガーの維持・存続のための試練の時期でもあった。このような状況は、デリーでは、クトゥブ・サーヒブやニザームッディーン・オーリヤーのような大きなダルガーにおいても見られたが、より規模の小さいダルガーにおいては、とくにその経済的な運営面で切実なものがあつた。現在、残念ながら、このダルガーにおいても、ピールザードを称する守護者たちの関係が必ずしも正常ではなく、ダルガーの運営とその権威の存続に大きな障害となっているが、このことも、こうした背景のなかで理解されるべきであらう。

今日、このダルガーにおいて、ウルスの祭礼が行なわれるのは、シェイフ・ナスイールッディーンの本廟のほかには、シェイフ・カマルッディーンの墓においてのみであるという。とくに前者の場合には、ヒンドゥーも含めて、毎年、インド各地のムスリムを集めて、かなりの盛大な行事となるようである。しかし、鈴木斌氏と私とが聞いたところでは、クトゥブ・サーヒブやニザームッディーン・オーリヤーのウルスに比べると、その間には、参詣者の数においても、寄進の品物や奉納額においても、なお著しい開きがあるようである。デリー地域におけるダルガーの現状については、鈴木氏とともに別の機会に報告するつもりであるが、とりあえず、一言触れにおきたい。

1 ただし、このような年代比定は、単なる墓石のみしかない遺跡のような場合には、不可能な場合がある。一般的にいつて、墓の場合には、その墓石の上に建てられているならかの建造物の造営の年代の比定が可能なのであつて、その墓の主人公の埋葬された時期はもちろん、本来の墓石が造られた年代を推定することは、著しく困難なのである。したがつて、ある人物が死んだのちに埋葬された時期、あるいはその上に墓石が設けられた時期は古くとも、その上に造営された建造物は、その時代よりもず

つと後代のものであるということも、当然、考えられるわけである。事実、そうした例は、スーフィーのダルガーの場合にも、いくらかも見出せることである。

このようなことは、墓建築のみならず、他の種類の建造物の場合にも、もちろん、あてはまる。年代比定は、あくまでも、現存する建造物のそれについてであって、現存する建物が造営されるまえの、より古い時代になんらかの建造物が造営されており、それに代るものとして、現存する建造物が建てられたという可能性もつねに考慮に入れておかなければならないからである。したがって、当初からの建造物の痕跡がなんらかのかたちにおいて残存していない限り、あくまで、推定によるしかなく、この点も、現存する建造物を歴史学的考察の資料として用いる方法の最も大きな弱点の一つである。とりわけ、宗教者の墓やダルガー内の諸種の建造物については、それが著名なものであればなおのこと、ふつうの墓などと異なって、後代に補修・改築される場合が多い。ダルガー内外の諸種の建造物を時代順に区分配列するに当たっても、以上の如き問題点について、あらかじめ、言及しておく必要があると思う。個々の建造物についてそうした問題がある場合には、本稿でも、とくに触れておくこととしたい。

2 たとえば、ダルガー内城東南隅に現存するB 10・B 11の墓建築〔T 28〕・〔T 27〕が、現在の南側囲壁にまたがって残っている事実からも推察し得るが、さらに、そのさらに東南わずかな距離に残るC 1の墓建築〔T 38〕が、おそらく、かつてのダルガー内城のなかにあったということも考えられよう。

3 Annett S. Beveridge, *The Memoirs of Bābur, New Translation of the Bābur-nāma, incorporating Leyden and Erskine's of 1826*, London, 18, pp. 475~476.

4 この二人のローディー朝時代の初代と第二代のスルターンの「墓と庭園」とを並べて記している点は問題である。そのことは、この二人の墓が近接していることを、まず、想定させるのである。しかし、もしも、現在まで伝えられている伝承に基づく比定によると、すでに本文でくり返し紹介しているスルターン・バハロールの墓とされるC 5〔T 133〕と、いわゆるローディー公園にあるスイカンドル・ローディーの墓とされる八角平面の墓建築〔T 79〕との距離は、同時に述べるには余りにも距りすぎている。

るのである。もつとも、同じ王朝のスルターンだから並記したと考えることもできるが、ともかく、スルターンニバハロール、スルターンニスカンダルの墓の比定に関しても、疑問を投げかける記述といえよう。

5 『テリー』第一巻「遺跡総目録」一〇三—一〇四ページ参照。

6 Bshir al-Din Ahmad, *Waq'at-i Dar al-Hukmat-i Dihli*, vol. III, p. 97~98.

7 *Ibid.*, p. 99.

五 おわりに——宗教權威と政治權力——

本稿では、シェイフニスィールッディーンニマフムードのダルガーの変遷について、とくに政治權力との関連に留意しつつ、ダルガーの内外に残存する諸種の建造物を資料として考察を加えてきた。すでに冒頭で触れたように、資料としての建造物の役割は再認識される必要があるが、だからといって、現存する建造物からあまりにも多くのこととがらを類推することも、ときには推理の遊戲に堕ちる危険性が多々ある。そうした点にも配慮しつつ、シェイフニスィールッディーンとそのダルガーの宗教權威と各時期の政治權力との関連について、最後に、若干のまとめを記しておきたい。

本稿第二章で述べたように、シェイフニスィールッディーンは、トゥグルク朝のムハンマドニシャールの治世においては、その宗教活動に関して、迫害とはいわないまでも、スルターンの側からかなりの抑圧を受けていたと思われる。この両者の関係の背後には、一方において、スーフィー聖者の宗教權威を利用し、みずからの權力の保持と拡大のために奉仕させようとするスルターンの側の政策上の意図と、他方において、政治權力との関連からでき得る限り

離れていようとしてきたチシュティ派指導者の姿勢が認められるのである。シェイフニザームディーン・オリヤールの晩年と、スルターン・ムハンマド・シヤールの治世は、いわば、この両者の利害関係と世界観との対立が次第に露呈され、両者の間の緊張関係が最も高まったときといえよう。シェイフニザームディーン・マフムードは、まさに、そうした状況のなかで、デリーにおけるチシュティ派指導者の宗教権威の伝統を担ってあらわれてきた人物といふべきである。

すでに触れたように、シェイフニザームディーン・マフムードの活動の拠点¹がデリーのいずれの地にあつたかは必ずしも明らかでない。しかし、現在のダルガーが存在する地点がそれであつたかも知れないという推定も、他のスーフィー聖者の場合に照らしてみるとかなり可能性がある。別の地にあつたとしても、それは、それほど離れた場所にあつたとは思わない。

注意すべきは、ダルガーのある地点がムハンマド・シヤール・トゥグルクの新しく建設したジャハーン・パナー Jahan-panah の東部城壁に近い都市計画については、南城壁に残る大水門「サートリブラ」〔W48〕の建設と関連して、かつてイン・パナーの新しい都市計画については、南城壁に残る大水門「サートリブラ」〔W48〕の建設と関連して、かつて私見を述べたことがあるが、⁽¹⁾ トゥグルク朝最大の強権政治をもって知られたこのスルターンの治世後期における首都デリーにおける支配層の中心拠点の役割を果した区域と考えてよい。このスーフィー指導者が、ジャハーン・パナーの建設後においても、デリーの他の地域ではなく、まさにそのトゥグルク支配層の拠点のさなか、あるいはその近傍の地において、そのまま活動をつづけたということは、スーフィー指導者と政治権力との関連から考えてみて注目すべきことといえよう。

すでに述べたように、フィローズ・シャー・トウグルクがスルタンに即位したのは、シェイフ・ナスィール・ディーンとトウグルク権力との関係は、前代と比べて著しく変化したのではないかと推定されるのである（本稿二二―二五ページ参照）。おそらく、このスーフィー指導者は、新しいスルタンたるフィローズ・シャーとは、むしろ、密接な関係にあったのではないかとさえ推測される。前章で述べたように、このダルガー内外に残るトウグルク朝後期の造営と推定される建造物は、結局、こうした政治権力とスーフィー聖者の宗教権威のあいだにみられた緊密な関係の所産であると、私は考えたい。

サルタナット末期の状況も、ほぼ同様で、このダルガーの権威は、シェイフ・ナスィール・ディーンの権威に対する支配層の崇敬の姿勢によつて、そのまま存続・維持されつづけたものと思われる。このことも、ひきつづく同時代の建造物の存在が証明するところであり、しばしば触れたバ・ハロール・シャー・ローディーの墓とされる建造物〔T133〕がもし本物であるとすれば、この両者の関係が最も密接なものとなるに至つたことを示すものである。

しかしながら、ムガル初期・中期にあつては、この聖者のダルガーは、皇帝や支配層の関心を、サルタナット後期ほどにはひきつけなかったのではないかと推定される。しかし、十八世紀の前半になると、ムガル支配層は、このダルガーにふたたび関心を示しはじめたことが、建造物の造営の面からも窺われる。とくに、ムハンマド・シャーの時代の城壁・城門の建立は、たとえ、その動機が、この聖者の権威に対する崇敬の念から出たものだけではないにせよ、デリー地域におけるこのダルガーの権威を著しく高める結果を齎したことは推察し得る。しかし、その後のやや荒廃へ向う状況からみて、ムガル末期からあと、このダルガーは、とくに権力の側からする特別な保護を与えられてきたとは思われないのである。

ところで、クトゥブ・サーヒブおよびニザーム・ディーン・オーリヤーのダルガーが、相当数のムガル皇帝や貴族たちの墓をその内域に持っているのと比べると、このダルガーの場合には、そうした事例はまったく見当らない。このことは、他の二つのダルガーに比べると、ムガル支配層が、この聖者のかつての権威にあやかろうとする意図をほとんど抱いてはいなかったということを示している。この点から推しても、デリーに君臨したムガル権力との関連に關する限り、さきの二人のチシュティ派の指導者のダルガーに比べて、この聖者あるいはダルガーの宗教権威は、低いものがあつたとせざるを得ない。

その真の意図が奈辺にあつたにせよ、ムハンマド・シャアの造営した城壁は、今日まで現存してきたチラーグ・デリー部落の存在を目立つものとする役割を果してきた。この城壁に囲まれた部落が、シェイフ・ナスィール・ディーンがそれによって一般に知られてきたところの「チラーグ・デリー」という名において今日まで知られてきたことが、逆に、シェイフ・ナスィール・ディーン・マフムードの昔日の権威を今日に伝えるうえに、大きな役割を果してきたことも、また否めないであろう。

これを要するに、シェイフ・クトゥブ・ディーン・バフティヤール・カーキーおよびシェイフ・ニザーム・ディーン・オーリヤーの系統をひくデリーにおけるチシュティ派第三の指導者は、こうして、トゥグルク朝後期以来、政治権力によって持たれた関心の程度に差はあつたにせよ、今日に至るまで、その宗教権威を、ダルガーの存続という事実を通じて、保持してきたものといえるのである。

- 1 荒「デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について」、『東洋文化研究所紀要』第三六冊、一九六五年、一〇三—一一二、一五九—一七五ページ参照。

本稿のはじめに記したように、ダルガーに関する私の研究は、過去数回に及ぶデリー地域滞在の経験によるところが多い。とりわけ、一九五四―五六年の間における私自身の初期のデリー滞在時代の経験が、その出発点になっている。この間、私が安んじて研究をつづけられたのも、故飯塚浩二先生とともに当時の東洋文化研究所において筆者の指導教官であった山本達郎先生に負うところが多い。その後、デリーのムスリム遺跡調査団の一員としてもしばしば御指導を受けた。ここに、先年還曆を迎えられた先生に拙ない稿をささげ、一層の御健康を祈りたい。